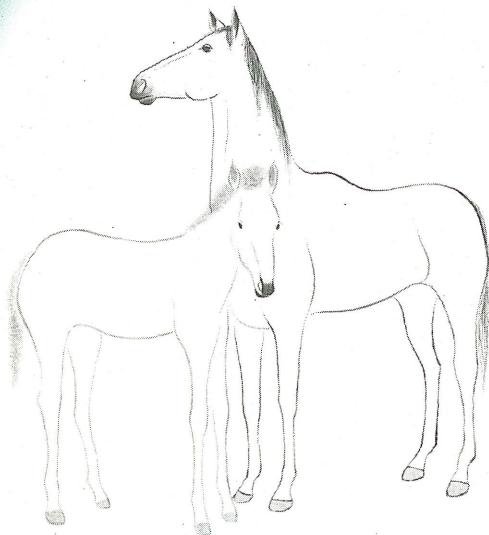
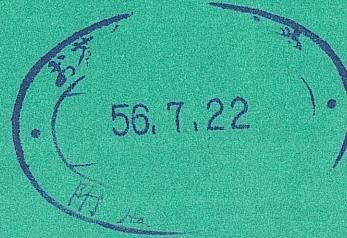


幼児の教育

第八十卷第八号

日本幼稚園協会
家庭・保育所・幼稚園



保育実技シリーズ



幼児の体育あそび1
■ マット・ボール編
著者：三宅照子
判型：B5判・120頁
価格：1000円+税250円



幼児の体育あそび2
■ なわ・平均台・とび箱編
著者：三宅照子
判型：B5判・120頁
価格：1000円+税250円



幼児の体育あそび3
■ 鉄棒・コマ・ドラムボン編
著者：三宅照子
判型：B5判・112頁
価格：1000円+税250円

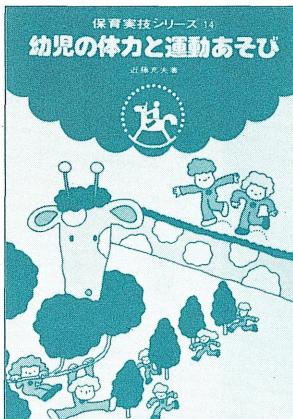


幼児の体育あそび4
■ プール・太鼓橋・雲梯編
著者：三宅照子 垣原芳子共著
判型：B5判・108頁
価格：1000円+税250円

子どもがこわがらずにさまざまな遊具にとり組めるためには、先生がたの補助の仕方が大きな意味を持つてくる。詳細にわたる補助の解説が大きな特徴。

運動遊具の正しい使い方、与え方をしめし、遊びのポイントや指導のコツの事例があげてあるため、子どもたちの能力に応じた発展計画をたてられる。

プールを中心とする水あそびについての指導法の基礎的な考え方と、子どもが水になれるための導入の遊びを発展させて、泳げる段階までの指導法について解説する。他に太鼓橋と雲梯を使っての指導法も紹介する。



幼児の体力と運動あそび
■ 近藤充夫著
判型：B5判・128頁・1000円+税250円
幼児の体力づくりを、発達の姿に即して無理なく指導できるように、さまざまな運動能力のテストの実際と測定法、テストの活用の仕方など豊富なイラストを挿入して保育の場に役立つよう解説。

幼児の体力と運動あそび
■ 近藤充夫著
判型：B5判・128頁・1000円+税250円
健康づくりの為のカリキュラム作成の参考書。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館



第八十卷 第八号

幼児の教育 目次

第八十卷 八月号

© 1981
日本幼稚園協会

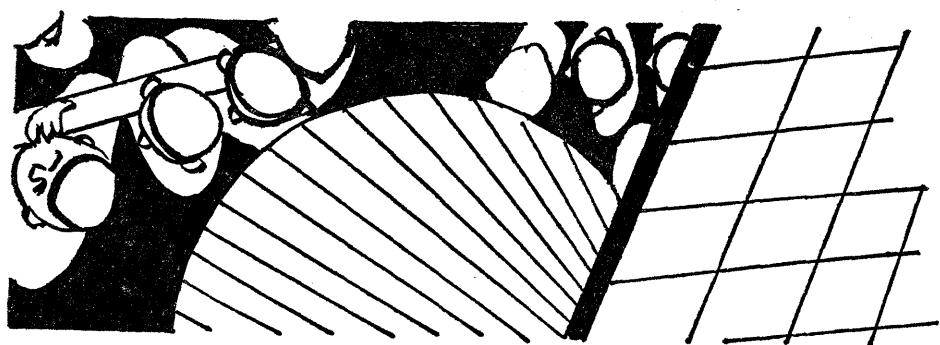
ものも言えず……………外山滋比古(4)

歴史人口学にみる生と死 八……………鬼頭 宏(6)

私の保育……………松井智枝子(13)

☆夏休み緑蔭図書紹介……………堀田吉雄(18)

水 中 清 堀田吉雄(18)
橋 沼 水 光 村弓子(23)
昌 一 弓子(26)
子 郎 子(29)
(34)



館かおる…(38)

続・保育の中の小さなこと大切なこと⑨…………守永英子…(42)

エリクソンと幼児教育③…………仁科弥生…(44)

子どもとの出会いの中で学ぶこと④…………水沼昭子…(50)

遊びと子どもの発達⑪(最終回)…………加古里子…(52)

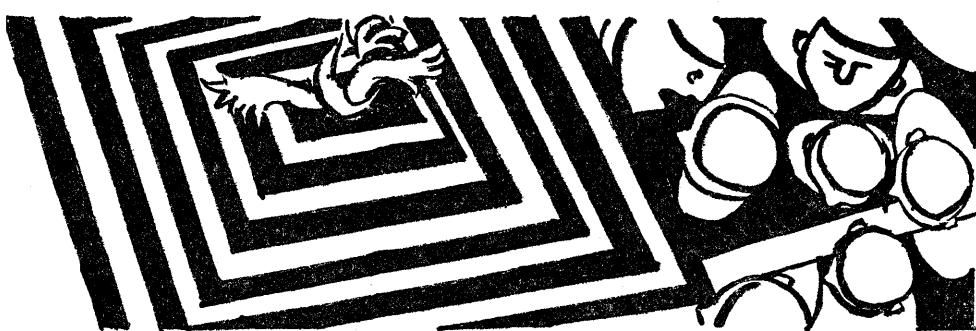
わわやかなできいじ…………大道博子…(57)

懸賞論文募集のお知らせ…………(62)

表紙・中村宗弘

表紙題字・比田井和子

カット・福田理恵



ものも言えず

外山滋比古

お茶の水女子大学の付属幼稚園長になった。それでは
考えたことは、こどもにどういう話をするかである。

かねてから、話をするのは文章を書くよりはるかに難し
いと思っている。大人を相手にものを言うのだってそうで
ある。まして、三歳だの五歳だのといった幼児にわかるこ
とを話すのは難中の難である。

どうしたらよいか見当もつかない。

もう十年も前のことになるが、学校帰りの小学生が三四
人、道草を食ひながらうちの門の前を通つて行く。

「きょうのこうちゅうせんせいのはなし、よかつたよな」
「ほんと」

小学校の校長の話はたいへんやりにくいときいている。
低学年にわかりやすいことを言つていると、五年六年はバ
カにする。高学年に向つてものを言つていれば、一年生に
はチンブンカンブン。ねらいをつけにくいというわけだ。
こどもがああいうことを言つているところを見ると、あ

の小学校には話の上手な校長さんがおられると思える。ど
んな人だろうかと空想したのはほんの一瞬の間であった。

「あんなにみじかいいこと、これまでになかったもんな」という子どもの声にわが空想はみじとうつちやりを食つた。

“スピーチとスカートは短かいほどよい”の中へ校長や社長の訓辞も加えた方がいいかもしれない。

小学校の校長はたいへんなものだと思っていたが、幼稚園の園長はもつと骨が折れるということを、いよいよ入園式まであと十日余りになるまで大して気にもかけなかつた、というのだからノンキである。

日本一の書店が店開きしたというから、参考になる本はないかと、見物をかねて出掛ける。ゆつたりしたところに幼児向けの本がたくさん並んでいるが、新米園長の話し方といった本などひとつもない。やむなく、幼児に聞かす民話を買って帰る。

なにかといふと、すぐ本に助けを求める。わるいくせとは知りながら、まず図書館へ行く。ついで本屋。それで思つた本がないと、たちまち無手勝流に豹変する。あわれな主知主義である。

近代の学問はどうしてこうも活字にしばられてしまつた

のであろうか。本に書いてないことは価値のないことときめてかかる大学は、ろくに話のできない人間でないと一人前に扱われない。

そういう先生に教わった学生に話し方などのわかるはずがない。学校の教師になるのに、国語の先生でも、話し方の単位をとつていない。まして他教科においておや。

それでも、だれも、先生の話し方はあれでいいのかなどと非難するものはいない。文句の言えるほど上手な人がいるからである。

それをいいことにして、お互に話す努力を怠つてゐる。大人同士なら我慢できる。こどもはおもしろくなれば聞いてはいられない。わからなければ騒ぎ出す。そういう相手に通じることばを身につけていなくては、園長の資格はないと思つて身の縮む思いである。

“ものも言わず”新米園長、猛勉強中と言いたいところだが、“ものも言えず”当惑中である。やはり、短かいことはいつまでもいいことだろうか。

(お茶の水女子大学)

歴史人口学からみた生と死 八

鬼頭宏

七、死亡

(一)

児死亡（第六回）の面からとりあげている。そこで学んだことはおもに死亡秩序（年齢別死亡頻度、確率）に関するところがらであり、次の三点に要約できる。

(1) 平均余命の長さは現代人の半分か、あるいはそれ以下であった。

(2) 死亡率はどの年齢階級でも高かつたけれど、とくに低年齢層で著しかった。

(3) 現代と異なり、出産に伴う危険が女子の寿命をしばしば男子より短かいものにした。

死亡の問題については、これまでも平均余命（第三回）や乳幼

ある。

工業化以前の社会における死亡率の高さはこのように短命をもたらしただけではなく、さらに次のような特性を与えていたことも強調しなければならないだろう。

まず第一に、死亡率が高かつたといつても非常に高かつたのではない。数年毎に襲つてくる流行病や凶作によつて死亡率が高められる異常年と、比較的穏やかな平常年が交互に現われた。

次に、地域差の大きかつたのも特徴である。人口危機の時代でも、地域によつて、極端な場合には隣合う二つの領地が全く異なる状態に置かれる場合すらあつた。

そして、身分制社会であることは死亡率にも反映された。死亡率の水準は、社会階層や経済的地位の関数であったといえる。項目を改めてこれらの点を確かめることにしよう。

(1)

古い型の危機は流行病や凶作によつてもたらされた。これまでに観察された町村ごとの、あるいは寺院単位の死亡率が年々、大きな変化をみせるのは人口規模が小さかつたばかりではない。鋸歯状の大きな変動こそが前工業化社会の特徴である。

また少々、細かいことであるが、異常年のあとには死亡率がひ

じょうに低い年が続く。これは病気などで体力の弱い人々が、いわば淘汰されたあとに、より体力の強い人々、または痘瘡の場合のように免疫を得た人々が残されるからだろう。そのため、平常年の死亡率はより低く、異常年はより高く計算されることになり、コントラストが強調される。一例を示すと、越前の八五ヶ寺の過去帳から得られた死亡数は、天保五~七年には四二〇〇~四四〇〇人であるが、天保飢饉の影響が現われた八年には一四四〇三人へと増加した。しかし翌九年の死亡数は二五〇〇人弱へと大幅に減つたのである(佐久一九七五)。

江戸時代の後半の地方別人口をみたときに明らかだつたように、気候が寒冷化したこの時期の凶作はとくに東北日本に大きな被害を与えていた(第二回)。工業化以前の社会に生きる人々の生存は、自然の力によつて意のままにされていたのである。

しかし、それは基本的に重要な人口変動要因であつたにしても、自然の力を増幅させたり、逆に緩和させる作用が、人間の側からつけ加えられていた。

例えば天明飢饉のときの陸奥国白河藩と相馬中村藩の対照は、松平定信が『宇下人言』の中で述懐していく有名である。

天明三年の大凶作のため相馬中村藩では半年余りの間に、農民の九〇%が死に、四〇%の行方不明者が出了。これに対し、隣接する

白河藩では一人の餓死者も出さなかつたという（荒川一九六七）。この相違の背後には地形的な要因があつたのかも知れないが、藩主であつた松平定信の対策が功を奏したのであらう。しかしそれ以上に、白河藩が血縁関係を通じて（定信は八代将軍吉宗の孫にあたる）、幕府の援助を得やすい立場にあつたこと、しかも穀留（こくどめ）によつて領内の米を困窮する他領へ持ち出すことを禁止する措置がとられたことなど、政治的な要因を見逃すことはできない。

情報伝達・運輸手段の未発達、流通機構の不合理よりも、各藩領がそれぞれ排他的な政治経済領域を成していることが、はなは

だしく程度の異なつた地域をモザイク状に併存させた理由である。

同様な現象は集落の機能的差異によつてもたらされる。先に紹介した越前の天保飢饉時の死亡数をみると、天保八年には前後四年間の平常年の三・七倍になつてゐた。この死亡倍率は都市と農村で低く（三・四倍、三・二倍）、漁村で最も高い（六・六倍）。農山村および山村はその中間にあつた（四・五倍、四・二倍）（佐久一九七五）。農村で低いのは食糧が自給できるからであるし、案に相違して都市が低いのは、領主や大商人などによる公私の救米扶助があつたためだらう。反対に穀物を購入しなければならず、

家屋も密集していく伝染病が蔓延しやすいうことが、漁村の死亡倍率を著しく高めたのだろう。

平常年においても集落間の人口学的対照はあざやかである。江戸時代後半の近畿地方と関東地方の人口が平常年でも停滞的であることを、大都市の存在によつて説明したが（第二回）、都市と農村の対照を対馬の例がよく物語つてゐる。

郡奉行として対馬藩の民政に携わつた陶山鈍翁は、退任後、「口上覚書」を著した。その中の記録から元祿一四年（一七〇二）から正徳二年（一七一二）の普通出生率と死亡率を、府中、郷村、銀山の別に計算することができる。

それによると十二年間の平均出生率（対人口千人）は郷村で最も高く（二五・九）、次いで銀山（一九・〇）、府中（一六・三）の順である。死亡率（同）は銀山で最も高く（三四・九、次いで府中（二六・九）、郷村（二三・三）である。城下町である府中では出生率から死亡率を差引いた自然増加率は1%以上のマイナス、銀山では1・6%ものマイナスであったのに対して、郷村は出生率が高いうえに低死亡率であつたために、自然増加率は大きかつた。

鈍翁は「府中の儀人高に応じ候ては生子高多（少の誤まりだらう）く候は、府中には妻を持不申下人多く、郷村には妻を持不申

下人少き故にて御座候」（『日本經濟大典』一巻七、一七六ページ）と、出生率の違いが生じた理由を述べている。府中（元祿一四年）の人口は約一万六千人）と銀山（同約六百人）では住民の三割を超える部分が他国出生者で、その多くが単身の出稼であったため

だろう。他方、郷村では他国出身者は住民の5%に満たなかつた。死亡率に関しては言及がないが、非農業地域の住宅環境や食糧獲得などの面で農村より不利な条件に置かれていたことは想像に難くない。

(II)

過去帳の研究から、江戸時代の死亡の現われ方とその原因が次第に明らかにされてきた。

表1には、本所回向院の過去帳から得られた、文化一二年（一八一五）から明治九年（一八七六）の死亡数が、月別に指數で示

表1 江戸住民の月別死亡指數（回向院過去帳）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
全 期 (1815~1876)	99	87	94	85	82	90	116	134	121	107	92	92
I 期 (1815~30) (1841~50)	99	82	87	79	81	99	118	126	114	110	104	99
II 期 (1831~40)	95	89	104	123	119	105	120	112	82	80	90	89
III 期 (1851~76)	100	89	97	80	70	78	113	148	140	114	85	87

- (1) (菊池1970) より筆者が計算した。
- (2) もとの資料は旧暦月であるが、新暦月へ換算した。
- (3) 数字は各期間の1ヶ月当たり死亡数を100とする指數。
- (4) 総死亡数は 5175.6 (新暦月換算)。

されている（菊池一九七〇より算出）。

全期間についてみると、死亡が多いのは夏季で八月にピークがあり、五月を中心に春から初夏にかけて死亡数が少ない。死亡の夏季への集中は江戸時代の特徴であって、このパターンは二十世紀初めまで続くことになる（松山一九七一）。

しかしこれも時代によつていつもそうなるとは限らない。十年期ごとに分割して、共通のパターンを描く年代を集めてみると、三つの型を区別できる。I期（一八一五～二〇、二一～三〇、四一～五〇）はもつとも平均的な夏季集中パターンを示すが、III期（一八五一年以降）は八、九月の山が強調されている。これは安政五年（一八五八）九月のコレラ、文久二年（一八五六）夏の麻疹およびコレラの流行があつたためである。

II期は最も特異なパターンを示す。死亡の山は四月から八月にかけて高原状を呈している。いうまでもなくこの時期には天保八年（一八三七）をピークとする大凶作が含まれ、端境期の食糧品高騰に基づく栄養不足と、流行病の発生が重なつて、収穫期前の死亡を増加させたのだろう。

以前にも紹介した飛驒国の一寺院の過去帳から、明和八年（一七七二）～嘉永五年（一八五二）の死因統計を、中沢と中沢（一九七六）に依つて要約すると次のようになる。

全体的には、「病氣」とか「長煩い」などの内因性死因によると考えられるものが最も多いが（三四%）、これを除くと、急性伝染病（一八%）、小児病（一二%）が大きな地位を占めている。

十歳を境にして長幼二つの年齢群に分けると、年長集団で目立つているのは「傷寒（腸チフスか）」と「時疫」の急性熱性伝染病で、これは春から秋を中心で多発している。散発的に、特定期間に集中してみられる餓死は夏を中心で発生し、しばしば時疫、痘瘡、痢疾などをともなう。すなわち凶作時の死亡は単に餓死だけではなく、流行病が追いうちをかけているのである。

年少者群で最も恐しい病気は痘瘡であろう。これは七月～九月に発生して翌年まで続くことが多い。次いで麻疹（五月～八月）、痢疾（七月～八月）も年少者を中心で死亡させる傾向があった。「虫（先天性弱質）」などの小児病は特定の季節に集中していない。

このように、多くの伝染病が夏季に集中するという疾病構造によって江戸時代の死亡の季節性が決定されていたのが、乳幼児死亡の場合には相当異なつていたようである。

銚子のある寺院の過去帳から得られた、宝曆二年（一七六一）から嘉永七年（一八五四）の五歳以下の死亡は、表2に示される月別変動をみせる。全期間の死亡については、旧暦十二月と一月に集中して完全な冬季集中型である。これはおそらく、地域

表2 銚子の乳幼児（5歳以下）死亡の月別指數（淨国寺過去帳）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
全期（1761～1854）	145	123	108	105	106	88	82	75	63	70	95	140
I期（1761～80）	147	135	134	86	125	107	99	75	68	63	60	106
II期（1781～90）	77	61	73	79	55	174	158	97	128	94	128	109
III期（1791～1810）	101	69	85	180	181	118	116	71	57	65	84	72
IV期（1811～54）	168	141	107	90	82	62	53	74	53	71	109	185

- (1) (銚子市1956) より筆者が計算した。
 (2) 月は旧暦。
 (3) 数字は各期間の1ヶ月当たり死亡数を100とする指數。
 (4) 総死亡数は2790。

性というよりも、飛驒の例から類推して痘瘡、感冒、そして寒さに起因する小児病に原因があったと考えられる。

ここでも時期によって季節型は異なり、I期（一七六一～八〇）とIV期（一八一一～五四）は冬季集中型、天明飢饉を含むII期（一七八一～九〇）は六・七月に集中する飢饉時のバターンといつてよい（ただし下総地方は天保期にも例外的に人口が増加していく、乳幼児死亡でも天保期は冬季集中型を呈している）。III期（一七九一～一八一〇）の旧暦四・五月への集中は、一八〇三年（三～六月）がそうであったように麻疹の流行によるものと考えられる。

（四）

前工業化社会が多産多死の状態にあったことはこれまでにみてきた通りである。しかし出生率と死亡率がどれくらいの水準にあつたのかという点になると、確かな数値はわからない。ナショナルなレベルでの人口動態統計がないからである。

ところが、明治期にはいつから的人口増加がいつ、どのように始まったのか、そして増加速度はどれくらいかという問題は、日本の経済成長と人口、人口転換を考える上できわめて重要であり、ホットな論争点になっている。これまでにもさまざまの推計

が試みられたが、そのひとつによると、幕末（一八六五年）の全国人口は三四五十一万人、出生率は人口千人につき三一、死亡率は二五とされている（安川・広岡一九七二）。この推計に基づけば、明治期の人口増加は出生率の緩やかな上昇と死亡率の緩やかな低下によって始まったことになる。

死亡率の改善が、いつ、いかなる形で始まったのかは定かではないが、江戸時代後半に平均余命の伸延がみられたことの延長線上にあることは間違いないであろう。長崎や京都を中心的に試みられていて人痘接種（カサブタの粉末を用いるもの）にかわって、嘉永二年（一八四九）に伝えられた牛痘接種法の成功と普及が痘瘡による死亡を減少させていったことは重要だろう。

天保期の人口危機からの回復過程で弾みのついた人口増加傾向が、内外の経済・社会的変化、とりわけ開港の影響に支えられてその後へ持続したものと考えられる。幕末の三十年は、近世的人口均衡が大きく崩れて、近代的な人口転換の第一歩を踏み出す時代であった。

〔参考文献〕

荒川秀俊 一九六七『飢饉の歴史』至文堂

銚子市 一九五六『銚子市史』

菊池万雄 一九七〇『回向院過去帳』日本大学文理学部自然
科学研究所『研究紀要』五

松浦昭 一九七二『近世後期における人口動態』『六甲台論集』
一九一三

糀山政子 一九七一『疾病と地域・季節』大明堂

中沢忠雄・中沢良英 「過去帳による江戸中期から現代に至る

山梨峠東農村住民死因の疫学的観察』『民族衛生』四二一三

佐久高士 一九七五『近世農村の数的研究』吉川弘文館

安川正彬・広岡桂二郎 一九七二『明治・大正年間の人口推
計と人口動態』『三田学会雑誌』六五一一・三

（上智大学）

私の保育

松井智枝子

いるのです。

私が保育者として、保育にたずさわるようになってから、ようやく一年目になろうとしています。

四月当初、学校を卒業したばかりの頃は、何もかもわからず、月日の流れがとても遅く感じられました。毎日、四季おりおりの風景が描かれたカレンダーをめくって見ながら、「こんな日がめぐつてくるのかしら」と本気で思った程です。けれども現在、そのカレンダーもめくり終え、一年間の経験や思い出を子どもたちといっしょにまとめる時期に入り一日一日がとても早く過ぎ去つてしまします。やらなくてはならないこと、やりたいこと、やっておくべきだったことなどが、学年末のぎりぎりの所へきて、山のように出てきていたのです。

「保育する立場の現場に入る以前、まだ学校で専門的な知識を学んできた頃、自分なりの保育を描き持っていました。それは、子どもたちの気持ちになって考えてあげられるような保育者でありたいということ、そして他人のことを思いやるやさしい心と物事に対して感動できる感性、子どもたちの間から芽はえたものを大切にした自発性と、養ない育ててあげられるような保育内容を持ちたいということでした。とはいえたることは、あまりにも漠然とした抽象的なもので、保育の実際を踏まえていない私の、理想にすぎなかつたのです。

私の勤務する保育園は、長野県下でも数少ない自由保育の形態をとっています。

しかし、私の学んできたものは、学級のはば全員を同一レベルと仮定し、幼児が保育者の指導のもとに、同一内容で一定時間に指導されるという、保育者中心の性格を持つ、一斉保育を主流とした指導案や実習ばかりでしたので、一体自由保育をやっていかれるのかどうかとても不安でした。

それでも、もともと楽天的なため、さほど思い悩むこともなく、幼児の最善の成長を思い一生懸命努力すれば、どのようない形態の保育内容におかれてもなんとかなるだろうとも思つていました。

今年度の始め、年中児と年少児の混合二十四名のクラス担任と決まった時には、保母になつたという実感が湧いてきて、頭ではすでに子どもたちと接している自分の姿を描いていました。

入園式前までの用品の整理や、子どもたちのロッカーのネーム貼り、名簿の作成など毎日が期待に満ちていて、今思起ことしてみるとこの頃が一番心のはづんでいたときのように思われます。

入園式もどこのおりなく行なわれ、いよいよ保育開始とな

りました。子どもたちも、私も胸をふくらませ待ち続けた日がやつてきました。ところが、いざ二十四名の子どもたちと接してみると、私の頭に描いていたことなど、全く夢のことでした。すっかり私は、失望してしまいました。もちろん、そうなつたのは、私ばかりではなく、子どもたちも同じだつたと思います。あこがれていたはずの園生活が、実は親もとを離れたとても心細いものに映つたのでしょう。母親にとりすがつて離れない子、泣き出す子、用便がひとりできずにもじもじしている子など、様々で二十四名が、それぞれ異なつたかたちで、不安な気持ちをあらわしていました。

そのような子どもたちを、私は沈んでいる間もなく、受けとめてあげて不安をとり除かなくてはなりません。でも表面で起つていることに対応することしかできずに、とても子どもたちの気持ちを考える余裕などありませんでした。毎日がそのようなことの繰り返しでした。そんな中で特に、何も言わずに泣き続ける子や突然大声で泣き出し手がつけられず私をおろおろさせる子の気持ちなど少しも、推し測れず閉口してしまい、ただ泣きやませることのみ先行して、降園の時刻の迫る時など、背負つておやつを配つたこともありました。

そんなふうですから、降園の準備もおおわらわです。しか

し、私の手際の悪さに、四月の入園当初といふことも手伝つて、他のクラスより早めに始めて、園庭に出終えるのは一番最後といふ状態でした。他のクラスの先生のときぱきとした誘導を見るにつけ自分の力の無さに、苛立しさを感じるのですがどうにもうまくゆきません。それでも、夢中で取りくんでいたその頃は、疲労とともに、わずかながら充実感があつたように思います。

私も子どもたちも、園生活のリズムに慣れそして落ちつき始めたころになると、子どもたちのあいだでは、徐々に自分を出しはじめて、いたずらに感情のいきちがいが起りだし、それと同時に悪い芽も出はじめました。それらのことは、自主性の現われとして喜ばしいことはすなに、私は、「今叱らなければ、叱っておかなくては。」と思つてしまい長いめでみてあげることができず、つい叱ってしまうことが多かつたのです。

叱り方については、家庭内でいえば父親のような、ピシッとした一言で済ませられるようなふうにできたらと思っていました。私も子どもたちも、お互いつきりした気持ちでわかり合えると思うのです。

ところが実際は、自分が考へているほどうまくいかず、物

を投げつけたり、けんかをしたときなど、子どもたちと顔が触れ合うような状態で、いちいちくどくどと説明を並べ、子どもにいい聞かせているばかりで、そのうちに、自分でも何を言つているのかわからない、なんとも情けない気持ちになつてしまうのです。もちろん子どもも、私の話などうわの空で、しっかり手をにぎりしめた私の顔を見つめているだけという中途半ばなままで終わってしまいます。

悪い芽を摘むのにはなんの役にも立たず、ただうるさいことを言う先生だと子どもたちが、思うだけにしかなりませんでした。

私の言うことを、素直に聞いてくれることばかり望んでいました。それが、始めのうちはだいぶうまくすすんでいたのですが、そのうちに、目もあてられないところまでいつしまつたのです。ある程度型にはめようとしていたために、その中に入り込んだ子はなんら、心に支障をきたさなかつたようですが、はみ出てしまつた子は、とても乱暴な口の利き方になり、私のことばなど聞かなくなつてしまい、私も何も言えないようになるという悪循環の繰り返しで、最も怖れてい放任状態になってしまいました。

技術も経験もないこのような私が子どもたちに与える影響

と思うと、不安がつのるばかりでした。

そんなあるとき、某幼稚園で公開保育が行なわれ、私も参加する機会を与えていただきました。そこで見た子どもたちの生き生きとした表情と、保育する先生のにこやかで軽快な動きは、とても印象的でした。頭から足の先まで神経がゆきわたっているというのには、ちょうどこのような状態をさすのでしょう。

たえまなく子どもたちと接していて、そしてどのグループにも必ず触れているのです。注意を与える時も、適切なことばで、ふたことくらいで済ませ、子どもたちも納得しているのです。つねに気を配り、子どもたちひとりひとりが満足できるような保育。目をみはるようでした。

少しでもいい、私もこのような保育者に近づくことができたならと、園に帰ってから思いおこしてみると、にこやかな微笑と快い動きが自然に浮び上がつてきました。そして、保育者として何もできなかつた私にも、のことならば、毎日の心がけで、できるのではないかとおもえました。

それでも一日、二日は『にこやかでいきいき』と心の中ではつぶやきながらがんばれましたが、いつのまにか、くもつた顔をしている、そんな自分に気づくのです。身の内からに

じみ出るようになるためには、相当の努力が必要だとつくづくおもいました。

子どもたちの活動から目を離さないようになると、部屋の中、園庭を、くまなく見てまわります。自分のうけもちでなくとも、相互に連けいをとつてみているので、あまりひどい放任状態はおこらないように思います。それでも、いたずら盛りの男の子たちは、特に心配で、なるべく居場所を確認するようになります。そして声をかけたりするのですが、何かこわしてしまったり、けがをしたりなど、いろいろなことが起つてしまします。一生懸命にしているつもりだけに、とても大きなショックを受けました。まだまだ力のたりなさを感じます。この次は気をつけて回ろうと、自分自身をはげまして、情熱と努力でおぎなうようにしようと思つています。

以来、自分の気持ちにも少しずつ余裕が出て、子どもたちの気持ちにも触れられるようになってきました。この一年間、毎日が新しい体験でした。子どもたちから、学ぶことは毎日毎日、ちがつていました。また、不注意から風邪をこじらせてしまい、健康であることが、保育者として、最も大切なことと、知りました。そして一番不安だった自由保育も、幼稚園の公開保育、講演会等、様々な勉強の機

会があり、そのおおよその型を学ぶことができ、今は吸収してきたものばかりで、消化不良をおこしています。

先日、回読した新聞の記事に、しつけについて書かれたものがありました。子どもたちは、大人のする様を見て育つていくものだと書かれていました。良いところも悪いところも。なるほどと身にしみる思いでした。あまりにあたりまえすぎて、見すごしていたことです。子どもたちのしつけについて悩んでばかりいないで、まず自分自身を、みがかなくてはならないのです。他人の悪いところを指摘することはたやすいですが、自分の欠点を改めることは、楽ではありません。人間として大切なことをたえず身につけるよう努力しながら、学び体験したことをもとに、本当の自分の保育をみつけたいと思います。

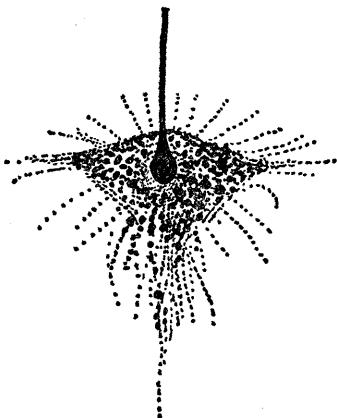
何も子どもたちに与えてあげられなかつた私ですが、子どもたちは、したつてくれ、また私がとまどつていてもどんどん成長してゆきました。半分放任状態にまでいつてしまいそうになつた子どもたちも、園長先生がふだんおっしゃつていられる「子どもたちのことを認めてあげることが、保育する中でとても大切なこと」という言葉を念頭におき保育し

うことにより、近づくは、だいぶおちつきができたようになります。
あとわずかしか残された期間はありませんが、基本的生活習慣をこまめにみてあげ、ひとりひとりが年齢に応じた段階までは、ひとりでもできるようにして、進級させてあげたいと考えています。私が真剣にとりくめば、子どもたちの心につたわるものがあるはずだと思うのです。

このように保育者としてもまた社会人としても、未熟な私が、ここまでこれたのも、なにかと御指導くださった、園長先生はじめ周囲の先生方のおかげだと思っています。

(長野・上田芙蓉保育園)





堀田吉雄

れた。当時は、民俗学研究所があつた頃であつた。

この研究所は、柳田国男の書斎を利用し開設されたのであつた。刺を通じて来意をつげると、大間知篤三が応対に出てきた。柳田先生に会いたいと申し入れると、大間知は、先生は地方から来る人を歓迎されるけれども、何分、ご高齢だから、時間は十五分か二十分程度にとどめるよう注意された。

私は、その頃はまだ勤めていたのであつたが、所用があつて上京した。半日暇を得たので、成城の柳田邸を訪

感激の一とき

私にとって終生忘れることの出来ない日というのは、

そんなに数多くあるわけではなさそうである。その大切な一日が、昭和二十六年九月二十一日であった。ちょうど三十年前のことであった。

であった。明治八年の誕生日から、年表を見るとやはり亥年だ。

猪は、向う見ずに、まっしぐらに突っ走るというが、私も確かにその傾向はあるような気がする。つまり、柳田國男と堀田吉雄とは比較するのも愚かな話だが、亥年ということだけは、紛れもなくぴたり一致する。

二十四才の年齢差は、親子の差と見てよいだろう。兄弟のちがいではない。一つ世代が異なるわけだ。先生は、まさに七十六才であられた。翌年喜寿のお祝いがあった。

こうして、私は、柳田の応接室で、初めて向いあつた。正確にいうと、九月二十一日の午さがり、二時頃であつたと思う。少し大袈裟にいえば、本居宣長の松阪の一夜という感じであつた。ただ、私は鈴屋大人のような将来性のある人物ではなかつただけである。

話は、伊勢湾口の神島から始まり、先生が桑名の船宿・船津屋に二度も泊つたというようなこと、私が伊勢民俗学会を創立したいという希望などを話した。桑名は私の住所だ。

時間はどんどん経過して、私は気が気がつかない。腕

時計の方に度々眼をやるものだから、先生は、これからどこかへまわるのかと尋ねられた。

私は、恐縮して大間知の注意のことをいった。先生は「そんなこといつたかね、かまわないよ。ゆっくりしまえ」という次第で、十五分が二時間にもなつた。

私は、申しわけなくて、重い腰をあげた時先生は「この本をあげるよ」といつて、無造作に、一冊の精型本をいただいたのであった。その本が『母の手毬歌』であつた。

奥付を見ると、版元・芝書店・昭和二十四年十二月一日初版となつていた。二年前の本を、べつだんどういうお考えもなく、恵与されたものかと、感じた。

誰の紹介状を持参したわけでもない、風来坊の私に、しかも初対面の私にだ、近著を恵まれたことは、並々でないことと私は感激したのであった。

『母の手毬歌』の末尾見返しに、私は次のように書きしるした。「柳田国男先生よりたまわる 昭和二十六年九月二十一日——堀田吉雄」—思えば、柳田も大間知も共に鬼籍に入つて久しく、今は逢うよすがない。

『母の手毬歌』

実は、「母の手毬歌」という一文は、も少し早く『村と学童』（昭和二十年九月三十日発行・朝日新聞社）の巻頭に収められていたのであった。終戦直後のいわゆる焼跡闇市時代のご本で、あのどぎくさの時に、よくもまあ出版が出来たものと思う。

今から見ると、仮縫のざっとした装釘で用紙もザラ紙であるが、挿画も入っており、記念すべき一本であった。私は、この本を東京の古本屋で求めたのであった。

私が柳田先生から頂いた『母の手毬歌』は従つて再度のご用ということであった。それだけに、柳田国男の愛着が感じられるという感じである。

本書も前著も、疎開学童が本などの乏しい田舎に住んで、わびしい思いをしているのを氣の毒に思い、何か少

年少女向きの話をと心をこめて物されたのであった。

ここでは、「母の手毬歌」だけを問題にしてみたいと思う。柳田はまず、手毬というものについて、詳しくそ

の歴史をしるしているのである。

マリといえば、今の子供は、ゴムマリの外は知らないであろう。木綿の白い糸をくるくる巻いて、直径七八センチぐらいの球体にする。柳田は、糸をつむぐ際のくず糸・端し糸などを集めてつくったものと述べている。

柳田の母刀自は八人の男の子を育て、近隣のもめ事にまで口を出していたしつかり者であったと書いている。それだけに、兄嫁はいんぼうであつたともいっている。その母刀自が、くず糸をもらいためて、美しい色糸で、模様を飾つたと述懐している。柳田自身も、見よう見まねで、マリツキもしたらしい。もちろん少年時代のことだ。

とんとんと地上でつく遊び方と、上にほり揚げてもてあそぶ遊び方があった。そうして手まりには、必ず手まり歌がうたわれた。主として女の子の遊びであった。

とんとん叩くは誰さんじや……

あるいは又、

つくづくぼうしはなぜ泣くね！

というような文句で始まる手毬歌のあつたことを、先

す柳田は挙げている。前の歌は、私も子供の頃、耳にしたことがあった。私の記憶はうろ覚えで、まことにおぼつかないが、ちょっとと思い出してみよう。

とんとん叩くは誰さんじや

せつたがかわって替えにきた

お前の雪駄は何鼻緒

赤いと白いの交ぜばなご

そんな雪駄はなかつたが

文福茶釜に茶がわいた

これで一こんかしました

一こんかしたとは、一貫貸したという訛りでもある

か。一問一答型とでも名づけられる手まり唄であった。

この種の歌は、そうとう種類が多い模様である。

また、柳田は「あれ見やれ向う見やれ」というような

歌があつて、よそ見をわざとさせようとするものがあつたと述べている。よそ見をさせて、マリを落させようと

はかったのだとあつた。これは「つく」よりも「あげる」方の手毬ではなかつたかと思われる。

しょんがい婆さん

しょんがえという唄は、江戸末に一世を風靡したといわれ、沖縄までも及んでいるのであるが、それにもなんだ「しょんがい婆さん」という手毬歌が、これまた日本の北から南まで、大流行をしたのであつた。

お茶もいやいや煙草もいやいや

しょんがいなアしょんがいな

しょんがい婆さん

ことし九十九で くウマアのへ

嫁入りしょとおウしやる……

お茶もいやいやの前があるので、歌い方や文句は、自由勝手にこじつけるのが又一興であつた。各地各様に

つくり変えたらしい。

今年九十九で 熊野の

薬屋へよめりしょとおしやる

嫁にくとて奥歯がぬけて

前歯二本におはぐろつけて

しらが三本にたけながかけて

前を通れば子供らが笑う……

まだまだ長くつづく歌であつた。ユーモラスな歌で、

最初はクの字づくしというわけであった。オハグロも、タケナガも、今では子供らに、どのように説明したらよいか、まことに厄介千万である。

これらの手毬歌の作者は何人であろうか。お寺の和尚さんとか、手習いの師匠とかいうような町や村の物知りの手すさびであろうか、追跡すれば面白いであろう。

キャッチボール時代になつて、糸かがりの手まりなど、民俗資料館へでも行かなければ見ることも出来ないであろう。しかし、こうした昔のマリに郷愁を感じ、一所懸命に蒐集している特志家も、世間にはいるのである。

『母の手毬歌』というタイトルからして、私どもは昔なつかしい思いがするのだが、塾通いに浮き身をやつす哀れな現代の少年少女はどう感じるであろうか。

柳田は、前掲の二著は、小学五、六年生、特に女兒のために執筆したといっているが、試験地獄の世の中だから、まり揚きなどという余裕は、今の子供にないのかもしない。

(伊勢民俗学会主宰)

第11回みどり会夏季合宿研修会

テーマ “保育の充実をめざして”

○日 時 昭和56年8月18日(火)、19日(水)、20日(木)の2泊3日間

○場 所 静岡県熱海市上宿 1-29 岡本ホテル

○費 用 参加費 1名 6,000円 宿泊費 2泊5食付 1名 14,000円 計20,000円

○申込・期 間 6月15日の消印より受付 定員になり次第〆切らせていただきます。

・払込先 口座振込 協和銀行茗荷谷支店 普通 No. 5077762 (現金の送金は受付ません)

・はがきに下記の事項をかき、1人1枚でお申込みください。

①氏名 ②男女別 ③現住所 ④勤務園名 ⑤勤務園住所 TEL

⑥夏季休暇中連絡先住所及 TEL

○申込先 東京都文京区大塚 2-1-1 お茶の水女子大学附属幼稚園気付 みどり会研究部宛

○定 員 400名

○内 容 各自の研修を充実するために研修スタイルを新らしく計画いたしました。

講 演

お茶の水女子大学教授 外 山 滋比古 氏

同大学附属幼稚園長

お茶の水女子大学教授 津 守 真 氏

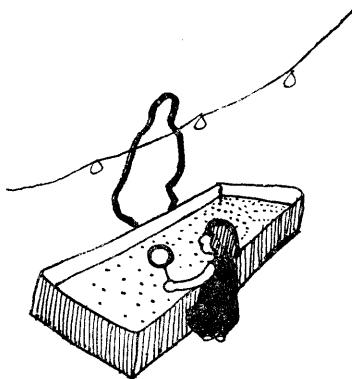
同大学家政学部長

シンポジューム “保育の充実をめざして” お茶の水女子大学教授 太 田 郎 子 氏

—自由討議によせて— ” 助教授 本 田 次 和 氏

筑波大学助教授 若 松 美 黄 氏

・詳細は申込先におたずね下さいませ



清 水 光 子

『ことばへの旅I～III』 森本哲郎 角川文庫

「つねづね放浪癖のある私が『旅』ということばに惹かれてこれを手にしたのは数年前であった。ここに取り上げられていることばは、古今東西のさまざまな分野の人達、ヨーロッパ記から、哲学者、文学者、科学者などの言論、著作などから採られている。それを著者は、人間につい

て、希望について、文明について、魂の深さについて、読書について……などという旅の道でまとめて、ただ単にことばを解釈していくのではなく、著者の透徹した思索を通しての哲学として語られているのが、むずかしい哲学書を肩こらして読むようでもなく気持安らかに我胸にしみ込んでくるという工夫なのである。

例えは驚きについてという「道」では「びっくりしたい」というのが僕の願いなんです。不思議な宇宙を驚きた

いという願いです」（国木田独歩のことばを採り、今、宇宙時代に入っているときの子どもたちの心に、この言葉を考え欲しいと思った。そして「単純なものを宿している」（ハイデッガー）「人間社会に固有で偉大な活動にはすべてはじめから遊びが織り込まれている」（ホイジンガのことばに、私たちが日頃安易に考え、口にしている遊び、子どもの遊びについてもっと深く掘りさげて考えてみることが必要なではないかと思つたことである。「帰りなむいざ 田園将に蕪れんとす」というあの陶淵明の詩に至つて、今我国の幼児教育のことを思うと、將に蕪れんとしていること、ここで原点に帰りなむいざーと声を高く叫びたいような衝動に年甲斐もなくかられたものである。「君子は淡くして以て親しみ、小人は甘くして以て絶つ」との友人について、の道の中にあることばで、このような友と手を携えて……、と切に念じたのである。

『名作の旅 伝説の旅』 森本哲郎 角川文庫

これは第一部は世界名作の旅で、「異邦人」「カルメン」

「アンデルセン童話集」「ドン・キホーテ」「アラビアンナイト」「希望」「キリマンジャロの雪」「車輪の下」が採られ、それらの名作の舞台となつてゐる地に著者自ら旅をしての情景など、私も何度か訪れてゐる地もあつて、楽しく思い出のアルバムをひもとく思いでよんでしまつたが、読後感の何とさわやかなことか。第二部のアメリカ名作の旅、第三部はスペイン組曲としてアンダルシア地方が舞台となつてくりひろげられる「セビリア」「グラナダ」「チゴイネルワイゼン」「コスター・デル・ソル」であるが、それぞれのアリアやシンフォニーが耳にきこえてくる思いであつた。そして第四部のエーゲ海の旅は島めぐりをしたときのコバルトブルーの海と空、大理石の柱廊にひめられたギリシヤ・ローマ神話の美しく、悲しい伝説などを鮮やかに心によみがえらせた。

こうしてあこがれづけた「旅」は、人間への遙かなる旅、生きがいの旅、ゆたかさへの旅、と道幅を、道程をふやしつづけ、今しも人生の旅が終ろうとしている私に、つねに道するべともなつてゐる。そして、ぼくの旅の手帖、で、エピローグに「ぼくたちの住むかけがえのない地球は旅人である。彼は太陽のまわりの空間をゆつ

くり旅している、（中略）太陽もまた旅人である」とある。ああ。

『鬼平犯科帖』(1)～(9)

池波正太郎

『愛の重さ』『春にして君を離れ』

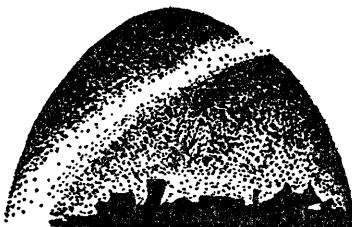
アガサ・クリスティ

学生時代に英語の教科書でめぐりあつたシャーロックホームズ（コナン・ドイル）の短篇から、当時中学生だった息子達とシャーロキアンを自認していた私は段々探偵物に興味をもつた。そしてこれも学生時代の教科書がきっかけで、アガサ・クリスティの作品にめり込んだのはもう十数年前にならうか、でもここに出したのはいわゆる探偵物ではない。クリスティが別名でかいた小説である。イギリスの中流以上の家庭の女の生きざま、人生観、社会観などが肌目細かい、手ざわりの暖いふく

よかな織物で仕立のよいドレスを仕上げてみせてくれたる感じである。私はこれらの本を若い女性、お母様達に推薦していうのはこれをお手本にしたら、とか面白くて為になりますからでもない。感じてください、とのみいうわけである。

テレビでも放映されているが、今までに第9巻が出ている。江戸中期の江戸で鬼の平蔵と盜賊どもから恐れられている火付盗賊改メ方という、今なら犯罪特別機動隊のような役の長官をとりまく人間模様が、精巧、重厚な織物のようなたしかさの中に人間味溢れる暖かさとユーモアをこめてえがかれている。私の睡眠薬といって、ベッドのわきに積ん読である本のうち、これはめざまし薬になってしまふ夜も度々である。電車の中ではこれは読まないことにしている。乗越しして、駅の人には「おばあさん、今日だけただで戻つてもいいけどもう駄目だよ」と言われるのはまつ平だから。

活字中毒症のような私であるが、こうして乱読している中で、すばらしい本にめぐりあうしあわせをしみじみ感じながら、ますます中毒症状が昂進していくようであ



中 村 弓 子

私は自伝的エッセーというものにとても惹かれる。その人本来の仕事の合間に書かれた息抜きのようなものとしてではなく、その人の世界全体の容れものとしての人間を知ることができるからである。それはちょうど一つの外国語の意味を知ろうとして辞書に当る時のプロセスに似ている。その語の語源となつた非常に具体的な意味から出発してだんだん抽象的・一般的意味へと辿ると、

その抽象的・一般的意味の微妙な味わいが納得され、他の類似の語との違いも把握できる。同じように、人間を具体的に知ることは、その人の仕事や思想の根を知り、その根から展開したものとしてのそれらのニュアンスを

知るために積極的な意味を持つと思う。素晴らしい人たちの自伝的エッセーを読む喜びもそこにある。それはまた秀れた生き方のフォーム練習のようなものもある。そしていつの日か自分自身も独自のフォームを作れるという希望も与えられるのだ。この縁蔭図書紹介の機会に、最近亡くなられた湯浅年子さんの自伝的エッセーをご紹介したい。

—湯浅年子『パリ隨想』『続・パリ隨想』
『パリ隨想3』(みすず書房)

湯浅さんは女子高等師範学校を卒業されてフランスでジョリオ・キュリー教授のもとに原子核物理を研究さ

れ、戦後三十年以上もパリ大学原子核研究所員として活躍された方である。昨年二月パリで亡くなられた。

第一巻の『パリ隨想』はジョリオ・キュリー教授への

尽きぬ学恩を記しつつ自身の科学者としてのひたむきな姿勢を示された「科学と人生」と、現在のパリ生活のさまざまな感概を記された「パリ隨想」の二部に分れる。これらの文章が雑誌「みすず」に連載されていた頃、私もちょうどフランスで留学生として来し方行く末に不安や期待を持ちながら懸命に生きていた頃であったので、日本から送ってもらったこの連載の文章は食いつくようして読んだものであった。この本の副題は「ら・みぜーる・ど・りゅうくす」直訳して「ぜいたくなみじめ草」であるが、すべての慣れ合いをそぎ落された外国生活が豊かな思索を生むと同時に身を切るように辛くもあるといふ両刃の剣のようなその辺の事情を見事に表わした題である。それからまた科学者としての湯浅さんをつき動かしているものは、多くの男性におけるような征服欲ではなく一種の「憧れ」、学問と人に対する少女のような憧れであることも強く印象に残った。湯浅さんにおいて学問は非常にスケールの大きいくじつに見事な

「少女趣味」の成就だったと言えるのではないだろうか。

第一巻のテーマが学問と文化であるとするなら第二巻のそれは病であり第三巻のそれは死である。第一巻が出版された年に湯浅さんは胃癌になった。第二巻はその病の経験が中心になっている。病人としての自分の置かれ状況を治療や病院の法的制度の点からじつに客観的体系的に分析されているのを読んで私は実験科学者としての湯浅さんの資質を垣間見る気がした。と同時にこの巻には湯浅さんがフランスでの長い生活で消化された本物のユマニスム(人間主義)が表わされている。それは「病人憲章」の病人の権利の問題や「夕潮」の作家モンテルランとラカサニュ教授の自殺の問題をめぐって読み取られる。この二人は両方とも効成り名遂げての高齢での自殺なので世間の人々は不審に思ったのである。しかしそれは死が「夕潮」のようにひたひたと迫つて来る時、まだ自分の手でそれができるうちに命の尊厳を守る最後の行為としてなされた自殺であった。それは言つてみればユマニスム的自殺である。そして癌から癒えたばかりの湯浅さんは明らかにそれに惹かれている。しかしギリギリのところで似て非なるもう一つのユマニスム、モノテ

ルランたちの自殺が後退のユマニスムなら「前進のユマニスム」とでも言うべきものを選んでいた。「ただ自分の動物的生命をいとおしみ細く長く生きることよりも、自分の理想とするものへの精進を励んでゆく方が、その結果自らの生命を縮めることになつても、それはある意味では人生を満ち足りたものとして過すことになるのでないだらうか。」（第三巻に付せられた愛弟子の方の解説によれば最晩年の湯浅さんの生活ぶりはまさに「前進のユマニスム」に貫かれた超人的なものであったことがわかる）抑制された文章であるがそこに表明されたギリギリの決意は読む者を揺さぶらずにはいない。

第三巻は七七年の日本への帰国とその後のことを記した「日本訪問記」に加えて昭和二十三年の隨想「黒葡萄」が納められている。この中の「光と蔭と——医者との対決について、生と死について」はまとまつたものとしては最後の文章であるが、これを「みすず」誌上で読んだ時は何とも言えず壯絶な感じをしてたまらなかつた。

東京から来る甥のために年末のパリであれこれ氣を使つてどれも思うようにいかないで焦つてゐる湯浅さんの姿の中に、残り少ない生命なのにあれこれしなければなら

ないと焦つてゐる湯浅さんのたまらない気持が重なつて感じられたからである。湯浅さんの文章そのものも焦つてゐる。一つのことをじっと書いていられないで、これを書いているともう途中であれのことへ行き、また戻つてくるという具合で、「前進のユマニスム」が最後のきりきり舞いをし始めたのを目の当たりにする思いがしてたまらなかつたのである。

湯浅さんがお若い頃から宗教というものにつねに深い関心を持つていらつしゃつたことは「黒葡萄」を見てもわかる。しかし第二巻の「科学と宗教の接点」にあるように、そのような「信ずるべき」真実が科学の「証明する」真実を包含するものかどうかは判らないという立場で、いらっしゃつた。と同時に「信すべき」真実の探究をも最後までやめられることはなかつた。第三巻の解説によれば最後の最後に湯浅さんはそこから一步踏み出されたように思われる。いずれにせよ絶筆に「祖国は日本以外のどこでもないのだ」と書きながらもついにパリで生きることを全うされた「ぜいたくなみじめ草」、この永遠の少女の底知れぬ勇氣に私はこの上なく打たれる。



水 沼 一 郎

「幼児の教育」などという畠違いの専門誌からお呼びがかかり、これも連れ合いが幼稚園奉公をしている因縁かと、ブック・レビューめいた駄文を物する羽目とは相成りました。

演劇や映画の企画を生業としている関係上、人一倍本は読んでいるつもり。とにかく、新聞はスポーツ紙も含めて毎日刊紙、それに全週刊誌から月刊文芸誌、書き下ろしの単行本もベスト・セラーは勿論のこと、およそ演劇や映画のネタになりそうなものはマス・コミ、ミニ・

コミを問わず、出来得る限り目を通し、同業他社に劇化権、映画化権を取られぬうちに原作者の許可を得て脚色、劇化、映画化するというのが企画部門の任務なのですから。

会社の小生のデスクの上には、新人、既成劇作家を問わず持ち込み、売り込み戯曲の原稿や、雑誌、単行本、連載小説の切抜きの類が、文字通り“山積”しております。読書マニアの小生にとって、いわば趣味と実益を兼ねた羨ましい仕事だと、友人に冷やかされることもまま

ありますが。

それでは最近読んだ本の中から二、三冊選んで小生流の御紹介をいたします。それも芝居や映画の原作小説などではなく、女性中心と想像される「幼児の教育」誌の読者にも興味のありそうなものをピックアップしてみましょう。

* * *

元ビートルズのジョン・レノンが射殺されたと思ったら、レーガン大統領の暗殺未遂と、この所アメリカの荒廃、退廃を裏付ける事件が頻発しています。米国市民に帰化して二十年余の女性が、福祉ケースワーカーとしての体験に基いて書いた『貧しいアメリカ』（岡田信子著、主婦の友社・八八〇円）は、アメリカに経済的のみならず精神的貧困が広く蔓延していることをリポートしていますし、『アメリカの狂気と悲劇』（落合信彦著、集英社・八八〇円）は、KKKに代表される黒人差別や組織暴力の核心に迫ろうと試みたインタビューを中心の本です。

もう一冊、ここに推薦するのが『ナルシシズムの時

代』（C・ラッシュ著・石川弘義訳、ナツメ社・二五〇〇円）です。これも病める現代アメリカへの診断の書であり、その社会状況や心理現象を、フロイトの精神分析概念であるナルシシズム（自己愛）をキー・ワードとして論評したものと言えましょう。

興味ある項目を挙げて見ますと、V・墜ちたスポーツVI・学校教育と新しい文盲、IV・フィーリングからの飛行——セックス戦争の社会心理——X・父親不在のパターナリズム、等々でどうか。J・レノンやレーガン大統領事件の犯人達が共に二十五才の青年であったこと、と共に自閉的、内向的な性格であったことが、低次元な実例まで挙げて報道されていますが、これは、わが国でも土居健郎のロング・セラー『『甘え』の構造』や、小此木啓吾の『モラトリアム人間の時代』などが読まれている風潮と照應するものでしょう。

この父権喪失の時代に、かつてハリウッドで二流とは申せ西部劇スターであった保守派、タカ派であるレーガン大統領に一種の擬似父親的な虚像を見出し、自己愛的なイメージを投影して心の安定を願ったアメリカ国民は、『力の政治』を訴えるレーガン政権の成立を容認します。

たわけです。こうした顕著な実例から見ても、"世界の警察"意識が裏目に出てしまつたあのベトナム戦争での蹉跌以後、アメリカに自己愛的な人間、ナルシシストが増加したことを歴史学者のラッシュは推論し、ナルシシズムの精神から構成されているのが現在のアメリカだと説いています。

ポスト・ベトナムのアメリカの病理を、われわれは「タクシー・ドライバー」とか「ディア・ハンター」などの映画で手とり早く見ることが出来ますが、政治の

スペクタクル化、ラジカリズムさえも街頭芝居化してしまこと、スポーツの堕落、英雄崇拜のナルシシズム的な理想化、などの現象がこの書では分析されています。

また映画の引用になりますが、「結婚しない女」という作品が好評でした。あの中にジル・クレイバーグ扮する離婚したヒロインが、孤独と欲求不満に耐えかねてセラピストに相談に行く件りがありましたが、あれなども現代の病めるアメリカを象徴する風景で、この書にも牧師や僧侶以上に現代人に心の平安を与えてくれる宗教以上の存在、セラピーについて述べられていて興味を惹かれます。

また、ナルシシズムの時代にあっては、男女の性関係ですら本来的な人間的出遭いという性質を失い、役割演技的な性関係と男女間の性闘争にとって代られていることが述べられています。これまた、かのエリカ・ジョンソン女史のベスト・セラー「飛ぶのが怖い」以来の"女性の自立"といった風潮、思想との関連で、「アニー・ホール」「ミスター・グッドバーを探して」とか「グッバイ・ガール」などの一連の"女性映画"によく描かれていました。

とにかく、著者がナルシシストの生れる原因として挙げている社会の官僚制化、情報社会化、父親の権威喪失などの風潮は、そのままそつくり日本にも当てはまるところですから、アメリカの自信喪失ぶり、内向的傾向を対岸の火災視することは出来ません。「エデンの東」の巨匠エリア・カザン監督は、「今の美国人は、憂い顔した子供なんだよ。可愛い奥さんとテレビの前でビールを飲み、外には出たがらない。たまに大評判のS.F.映画だけを見に行き、そつとレーガンに投票する——」とポスト・ベトナムのアメリカ社会の幼児化を指摘しています。テレビの漫才ブームを見ていて感じるのですが、

世は挙げて、いわゆる“引き延ばされた幼時期”を送っているのかも知れません。

* * * *

“女性の自立”に関して、マーケティング・リサーチの資料に『シングルウーマン——OL市場の量的変貌と質的変貌』（坂本登編・ブレーン別冊、誠文堂新光社・一八〇〇円）があります。ここでいうシングルウーマンとは、未婚、既婚を問わず、また独身であれ、母親であれ、また有職無職を問わず、とにかく“一人立ちし”た“あるいは”自立した“女性の総称です。”ブレーンという経営専門誌の別冊という一種の“臭さ”は感じられず、シングルウーマンをあらゆる角度から調査・分析し、現状からその将来像までを集大成したものであります。

たとえば、「シングルウーマンの生活意識と消費行動」という調査報告も面白いのですが、主として男性筆者によるIV、女性市場へのアプローチ、が興味津々でありました。「悩み模索するシングルウーマン——仕事と結婚についての意識を中心とした分析」とか「一人暮らし

の女考——その凄絶なる実態」「旅をする女の本音と建て前」「自立したい」意欲と各種学校など、小生も会社の部下の女性やら、女友達の誰彼の顔を想像して驚いたり、思い当つたりしました。

下手な紹介よりも、それぞれのキャプションを引用した方が内容を判つて頂けるかと思いますが、これらのデータを企業戦略の資料として利用する立場から見ると、「シングルウーマンは幻想である。幻想を清算する過程で真の姿が現れることを期待する」「スキンシップふうライズ体験と各種のメディア接触のなかで、実用的な生活情報を得ようとしているヨコ型女性たち」「自立した女のイメージと実際の自立度がキーワード。その兼ね合いで考へた戦略が重要だ」「マーケット化された存在として女性をとらえる、それが“女”にとって効果のあるクドキ文句となる」云々と、いささか皮肉たっぷりで刺激的なキャプションが目にできます。当の御婦人方がお読みになつても面白いリポートです。

* * * *

先程、アメリカの一連の女性映画を列挙しましたが、

その女性映画ブームの端緒となつた作品に、社会派フレッド・ジンネマン監督の「ジュリア」があります。ヒロ

イン二人に扮したジョン・フォンダとバネッサ・レッドグレープという二大知性派女優の共演で話題になつた作品です。これは、現在七十六才になるアメリカの女流劇作家リリアン・ヘルマンの回想録の映画化とも言えますが、彼女の戯曲の代表作は、名匠ヴィリアム・ワライー監督で、オードリー・ヘップバーンとシャーリー・マックレーン共演で映画化もされた「噂の二人」（原題「子供たちの時間」）で、これは昨年夏三越劇場で、有馬橋子と南風洋子の共演で上演されましたから御覧の向きもあるかと思います。そのリリアン・ヘルマンの自伝『未完の女』（稻葉明雄・本間千枝子訳、平凡社・一八〇〇円）もお奨め品です。

彼女の生い立ちに始まり、成人してからの出版社やハリウッドでの仕事を通じてのヘミングウェイやフィッツジエラルド、フォークナーラロスト・ジエネレーション作家達や、映画、演劇人らとの交際、スペイン戦争やソ連訪問の体験談等の日記も挿入され、際立つて強烈な個性を持ち、赤狩りのマッカーシー旋風にもひるむことな

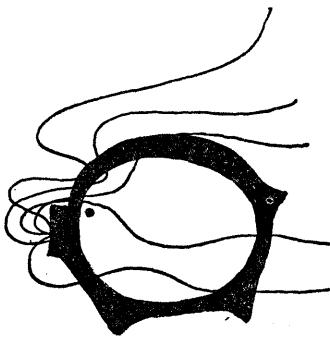
く、信念を貫き通した女流劇作家のドラマチックな回想録です。

その中でも、何回かの別居を挟みながらも三十年間同棲生活を送ったハードボイルドの推理作家で、「影なき男」や「マルタの鷹」などの名作を書いたダシェル・ハメットへの追想は、敬愛の情が色濃く点綴されていて読者の胸を打ちます。二人がお互いに自立し、お互いの才能を尊敬し合いながらの同棲生活には、清冽な印象さえ受けた感動的です。

全米図書賞を受賞したこの本の影響によつて、ハリウッドの女優達の自伝、回想録のスタイルが一変したとさえいわれている名著の御一読をお奨めします。

（松竹・企画芸文室）

大橋昌子



市川衛著
『蛙学』

裳華房 一九七八年（第八版）三〇〇〇円

「Wild, wild world of animals (日本語訳名：世界の野生動物) 全二二巻」(写真集)

バシフィカ発行

タイム・ライフ図書販売発売 六八二〇〇円

「蛙学」は、一九五一年初版の古い名著である。"あがく"と正確には発音するそうだ。本書第八版は、一九五四年の修正第三版が、再版を繰り返したもので、昔の古い字体のままの書物である。三十年も前に書かれた科学書が、未だに有効、かつ、新鮮に読まれていることは、自然科学では極めて稀なことで、それだけにカエルについて本書に匹敵する良書が、それ以後みられないということも知らない。いつの時代にも新しい発見をもつて

読まれることは、それだけ我々が、カエルのような当たり

前の生き物でさえも、知っている様で知らぬ事の多い由縁である。もっとも動物学を学ばれる方々にとっては当然の古い参考書であるらしく、その意味では、我々素人にだけ興味深い書物であるに過ぎないのかも知れない。

蛙間関係でしかない。

医学の分野では、やはり人間と同じマウス・ラットからヤギ・ブタ・イス・サルに至る哺乳動物が、何と言つても多く研究対象として扱われる。これらの実験動物は、業者あるいは研究者の手でクールに繁殖・飼育され、時には愛玩されることはあるとも、所詮は人間の手前勝手な興味でしか扱われない氣の毒な運命の動物達である。彼らのように、籠や檻の中からでは、本来の動物の姿、生きざまや、その神秘的な個々の生命力を私達に伝えてはくれない。それから見ると、カエルは、古くからその生理・発生について詳細に研究されているが、特殊な種類を除いては、広く自然界に繁殖し、自由に生育している動物である。我々には、幼い頃のカエルのイメージと中学・高校の頃のカエルの解剖の記憶に留まり、それ以上のカエルの知識は持ち合わせない、淋しい限りの人・

「蛙学」は平易な文体・内容のカエルの総説邦書であり、カエルに関する総合的な知見が、やさしく解説されている。内容は、第一章で、カエルの形態、各臓器器官の形を機能と関連づけ、組織的な構造までも加えて説明され、昔の解剖実験を想い起させる。第二は、発生。著者の専門分野でもあり、実験発生学的に力がこめられている。カエルの卵が卵巢の中で成熟して行く過程から、輸卵管に取り込まれ、その管壁から分泌される寒天様の物質で卵が包まれる。そして外部へ産み出された卵に何万という精子が集まるが只一ヶの精子しか卵の中に入れないと、受精。この現象説明も三〇年後の現在、十分通用する正しい見解が述べられている。第三章は、おたまじやくしからその尾が消え、肢が生えてカエルになる変化過程の「変態」の章で、形態的変化のみならず、頭骨の変化や皮ふ内臓諸器官の更新、さらには変態現象が、ホルモンによって誘発されるという機構まで考察が及んでいる。第四章は、性の決定とその転換。カエルは、元来雌雄同体に生まれ、むしろ雌性で産まれ、変態のある特定の時期に生殖腺が雄に転化するよう刺戟を受

けたものだけが、精巢に発達して雄となるが、この刺戟

を受けなければ、そのまま発達して卵巣となり、雌のカエルになるという。次の第五章は、再生と奇型で、この章までは実験发生学の興味の特色と言える研究室内で判明した知見である。第六章は、カエルの系統と分類、少し退屈であるが、本邦産のカエルだけでも種類の多いことに驚くとともに、人間と猿の違ひほど、種属間に大きな差異のあることが理解される。

最後の第七章は、最も一般に興味がもたれるカエルの生態をとり上げている。カエルは種類によって、水中・陸上・樹上・地中と至るところに棲息し、適当な温度があれば何とか工夫して生きているようであるが、産卵には結局、水辺へ集合するという。樹上に卵を産みつけるカエル（モリアオガエル——著者が研究対象とした）も、おたまじやくしになると樹上から水辺へばとどりと落ちて泳ぎ出すと言うから、やはり水辺の樹上に違いない。カエルの繁殖習性も、種類によつてまちまちで、子供（卵からおたまじやくしになつて迄も）を背負つて育てるものまであるのには恐れ入る。こうした種類は、特に環境

のカエルの種類である。

両棲類であるカエルは魚類や爬虫類と同様に、変温動物と称して体温が外界の温度の昇降に左右され、著しく変動し、気温が下降すると“冬眠”という状態に入る。

一体、どのように冬眠中は過すのであらうか、その間のエネルギーは体のどの部分から供給されるのか、また、冬眠からさめて春、瘠せ細った体の何処に産卵という大事業のエネルギーの貯えがあるのだろうか。その様な不思議に、答が用意されている。産卵のあと、空腹を一挙に解消しようとカエルは食食になり、よく食べるという。一体何が食餌なのか、よくも研究したものだと驚く程の種類の、カエルの好物が挙げられている。最後に、カエルの分泌する毒。そして天敵。生きる為の手段と防禦方法が述べられている。

この「蛙学」を読んで、カエルの体の構造一つ一つが、大自然に生きるに都合よく、また、持ち合わせた能力の範囲で必死に生きる様子が浮んで、カエルは可愛い、ひたむきな生き物の一體である事が理解されてくる。

変化の激しい、強いスコールなどを受けるアフリカ地方

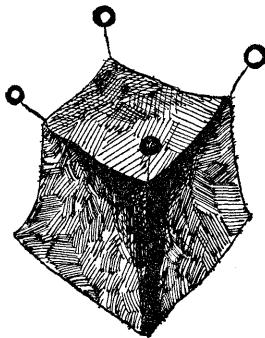
野生動物のこの様な生態研究は、自然界を舞台に人を近づけぬ世界であるだけに、根気と時間を要する難しさがあり、まだまだ個々の動物の行動まで全て追跡されとはいえない。それ故に今後の学問分野である。
その一つの試みが、テレヴィジョンフィルムにされ、写真集となつたのが、後者に挙げた「Wild, wild world of animals」全二三巻である。水中的小さなプランクトンから、大きな象や大亀まで、ほとんど索引以外の頁が写真で埋まっている。実に美しいきれいな色彩である。各巻のまとめ方も、いわゆる動物分類学と異なつて、動物の大きさで、また棲息地ごとに、種々の防禦方法で、
と、テーマを挙げてまとめている点、新鮮な試みで興味深い。この様に、動物の系統樹から、姿・形・色と棲息状況・背景までを、鮮明な写真集から直接視覚で確かめられる具体性には、どの様な詳細な文字説明もかなうものではない。本シリーズのオリジナルである英語版は、日本語訳判よりやや安値ということで、英語判を購入したため、日本語訳判の各巻のタイトル名やその他の様子が判らないが、購入時の印象では、タイトルはじめ全体に少し意訳があるよう記憶する。

「蛙学」で知ったカエルの外観や生態の概要も、本シリーズのカエルで十分脳裡にイメージとして納めることができ。『Frogs in Fancy Dress』の頁で、きれいな色模様の可愛い、カエルの何種類もが写し出されてみると、氣味の悪い印象から開放されて、これも新らしい発見であると安堵する。

本シリーズを手にして、改めて自然界に生きる動物達に感動を覚えるのは、写真の素晴らしさばかりでなく、各巻の序文の説明が、簡略にして十分に、動物の系統と棲息の状態、世界中の分布状況まで、その背景を確かなものにしているからであろう。

本シリーズは、眺めているだけで好奇心の塊となり、時の経つのも忘れてしまう。この本の中から知らず知らずに、人間としての生き方が発見される様である。

(お茶の水女子大学・生活環境研究センター)



か お る 館

夏の夜は彼岸と此岸をへだてる扉が静かに開く気配がする。思えばこの一年余の間に、様々な分野で活躍した多くの女性たちが他界した。一九八〇年の二月には、日本

のキュリー夫人とも称された女性物理学者湯浅年子が、長年住み慣れたパリで逝った。五月には新劇女優と

して著名であった東山千栄子や宝塚歌劇団の天津乙女が逝き、あらためて人々にその舞台での姿を懐しく思い起

こさせたものである。また混血児の母といわれた、エリザベス・サンダース・ホーム園長の沢田美喜がスペインの

マヨルカで客死した。七月には料理研究家の江上トミ、あのにこやかな笑顔と話しぶりを覚えていける方も決して少くないであろう。そして十一月には婦人運動の理論家として名高かった山川菊栄が満九十才の誕生日の前に逝き、シャンソン歌手の越路吹雪もその若さを惜しまれながら去っていった。今年の二月には婦人政治家の市川房枝が八十七才の生涯を閉じたことは、まだ私たちの記憶に新しい。

歴史が二十一世紀に向かって大きく転回し始めたよう

な、そんな動きを感じさせる訣別の時が続いた。いつの世にも残された者たちは、命ある限り自らの火をともし続けて生きていかなければならぬ。私たちの前を歩いてきた女性を礎として。仕合わせなことに、彼女たちの多くは贈り物を残してくれた。自伝、そして珠玉のような言葉。夏の静謐の中で私たちは数々の魂と出会うことができる。

市川房枝『市川房枝自伝—戦前編』

(新宿書房 一九七二年)

市川房枝は後年、婦人運動に生涯をかけた動機を聞かれると、夫の横暴に我慢して働く母の姿に理不尽な思いを抱いたからだと語っている。愛知県の農家にうまれ、働きながら勉強し続けた若き日の房枝の姿は、その母の無念さをはらすためのものだったのかもしれない。そし

動もまたその上に築かれていた。四十一才の誕生日に、自らを常に第一線におき、運動を続けることの辛さしさをさりげなく語る彼女の言葉は、ふいに私たちの胸をつく。彼女が生涯突き動かされ続けたものが、一体何であつたのかを、私たちは簡潔な文章の行間に汲み取らねばならないであろう。そして市川房枝が追求し、実践してきた「女性と政治」について考えてみる時、氏の生涯はあらためて歴史の中で検討されねばならないであろう。なおこのほど「八十七歳の青春」と題する氏の長編記録映画が制作された。白髪と深いしわに刻まれた彼女が、暖かくさっぱりとした声で自らの生涯を語り続ける姿に、少なからぬ感動を抱く方もいるかも知れない。

山川菊栄『おんな二代の記』

(平凡社・東洋文庫 一九七二年)

市川房枝を実践の人とするならば、山川菊栄は理論の人であるとは高群逸枝の言である。氏は、婦人問題や労働運動の理論家としては勿論、随筆家としても類いまれな才能を有していた。それらはみな豊かな人間性に支え

られた彼女の知性の発露に他ならない。彼女のそうした

沢田美喜『黒い肌と白い心』

(日本経済新聞社 一九六一年)

魅力が最もあらわれているのが、母千世と娘菊栄の生涯を綴った、この『おんな二代の記』である。母千世は自分が育った頃の水戸の様子だの、若い時分、東京に出た頃の思い出話など繰り返し娘の菊栄に語ったという。それを記した「ははのころ」には、幕末から明治の初期にかけての日本が、一人の女性の確かな眼で描き出されていく。そして「少女のころ」から昭和の敗戦までの菊栄の半生には、自ら信じた社会主義思想の理論と実践についての省察があり、同志や近隣の人々との交友が描かれている。その人間描写には鋭い観察力と知的ニーモアがあふれている。また子供の頃新聞が好きで、祖父から古新聞を贈られたという逸話のある菊栄は、常に歴史の動きと、その中に生きる人々への目くばりを忘れることはない。私は本書を読むたびにそうした新たな発見をして、その奥行きの深さに驚かされる。近代日本の「女性と歴史」について考える際の好著の一つであろう。なお一九七九年には『山川菊栄の航跡』「私の運動史」と著作目録(ドメス出版)が刊行されており、現在岩波書店で『山川菊栄選集』も制作中である。

「私は三十三年の間、花束をつくりつけできました。

沢田美喜が混血児の母となる決意を抱いてエリザベス・サンダース・ホームを創設したのは、昭和二十二年美喜四十六才の時であった。三菱本家岩崎久弥の長女に生まれ、外交官に嫁いだ氏のそれまでの人生は、自由で華やかなものであった。だが彼女は早くから聖書にひかれ、イギリスの孤児院を訪れた時には、残りの人生を孤児救済に捧げることを誓うのである。その時から十八年後、日米両国の妨害や世間の迫害と戦いながら、エリザベス・サンダース・ホームを創設し今日に至るまで築き上げてきたその信念と努力には誰しも敬意の念を抱かざるを得ないであろう。この仕事を通して結ばれた、作家パール・バッカや歌手ジュセフィン・ペーカーとの交遊も感銘深い。一九八〇年に出版されたホームの子供達の思い出を綴った『母と子の絆』(P.H.P.)のあとがきに、氏はこう記した。

……弱っていた花達は美しく生きかえりました。或る花はその葉かげにかくしていたトゲで私のゆびを刺しました。……三十三年の年月の流れた今日、私は私の花束の美しさに目をみはりました。……私は長生きをしてよかつたとつくづく思いました」

こう記して一ヶ月後、氏は私たちに「母と子」と「女性と福祉」について、重い問いかけを残して、そのダイナミックな生涯を閉じたのである。

湯浅年子

『パリ隨想 ら・みぜる・ど・りゅっくす』

『続・パリ隨想 る・れいよん・うえーる』

『パリ隨想3 むすか・のわーる』

(一九七三年、一九七八年 みすず書房)

最後に自伝ではないが、女性物理学者の隨想を紹介しよう。『パリ隨想』、『続・パリ隨想』における日本とフランスの文化への省察、科学と人生、女性と科学などについての詩情豊かな文体で展開される氏の思索は、すでに多くの人々の心を魅了している。没後にまとめられた

『パリ隨想3』は、最後の隨筆となつた「日本訪問記」

と、氏の思索の原点ともいえる「黒葡萄」と「離脱」の詩」とから成っている。初期の二編は、女性が学問を続ける機会がほとんど閉されていた戦前の日本社会で、自らの可能性と戦いながら限られた道を切り拓いていた彼女の思いが語られていて深い感動を呼ぶ。文末の山崎美和恵氏による解説は、教え子の眼を通してみた湯浅年子その人の姿が示されており、心あたまるものとなつてゐる。そしてあらためて彼女の生涯に想いをはせる時、私たちは再び『パリ隨想』のあとがきとして記された、氏の「自伝」を手に取らざるを得なくなるであろう。そこには病弱な子供時代をおこった氏が科学の道へのやみがたい気持にかられて渡仏するまでの姿が描かれている。氏はその中で「みぜーる・ど・りゅっくす」という草の名をこの書の名にして私の一生の要約としたいと記している。その草の名の意は、「せいたくなみじめ草」。そうした氏の生涯と思索の軌跡は、私たちが「女性と科学」を考える時決して見過すことができぬものであろう。

(お茶の水女子大学女性文化資料館)

続・保育の中の小さなこと大切なこと⑨

守 永 英 子

今年は、久々の三歳児との出会いである。私たちの園では、三年間続けて、同じクラスを持ちあげることが多いので、三年ぶりの三歳児クラスの担任ということになる。

三歳児を担任して、三年間育て、卒業させて、又三歳児に戻るというこの巡りは、今までに何度も経験していることであるのに、改めて、三歳児に会ってみると、又、新たな感慨が起こる。

三歳児というと、そのほとんどが、家庭から初めて集団生活に入ってくる子どもたちである。これから長い人生の、社会生活の始まりが、子どもにとって、快いものであつてほしいと願う保育者は誰しも、大変に優しい気持で、入園してくれる子どもたちを迎えることと思う。私も例外なく、そのことに充分心を配った。

入園二週間程終った頃、母親から離れたあとぐずっているTのそばで、氣を紛らすために絵本を広げている私のところ

に、二、三人の子どもが集まってきた。Rも、ままごと道具を籠に入れて、絵本をのぞきにきたが、突然、「先生ってやさしいんだね。先生も、おなかから生まれてきたの？」あまりの唐突さに、彼の心を計り兼ねて、とまどいながら、

「そう、先生も、先生のおかあさんのおなかから生まれてきたの。Rちゃんと同じね」と答えると、彼は、「うん」と満足したようであった。三歳児の心は、ときどき計り知れないものである。

入園後三日目に、「幼稚園を楽しい！」とKが、ポツリと言った時も、不思議な感じであった。彼女は、まだ幼稚園の生活を楽しめていないと思われる数人の中の一人であったから。ときどき笑顔は見せるものの、まだ何をしていいか分からぬといった様子で、自分からの活動は、殆ど見られなかった。外見からは見えなくても、彼女の心は楽しんでいるのであろうか。三歳児が言葉で表現できるものの限界を思う

時、感じ取られながら表現されていない三歳児の心の世界の大きさに、ふと恐れを感じた。

面白いことに、初めは、楽と思われたこのクラスが、だんだん大変になってきたのは、Rが「先生つてやさしいんだね」と言つた頃である。子どものさまざまな活動が、私の認識的な許容度をゆざぶるのは、彼等の自由感が増していくことと一致するようである。

水槽の中に手を入れて、どじょうやおたまじゃくしをつかもうとするYやN。水槽は手を入れたりしないものという生活の節度を守れるようになってほしいという思いと、恐らく、水槽の中に手を入れてつかんでみることでしか、ある感触を経験することはないのではないか、この機会に経験させてもよいのではないか、という思いにゆれながら、「おたまじゃくしは、手の中より、水の中の方が好きなのよ」と言つてみる。「すぐ放してやるんだよ」と説明するNに、私の許容度は広がる。

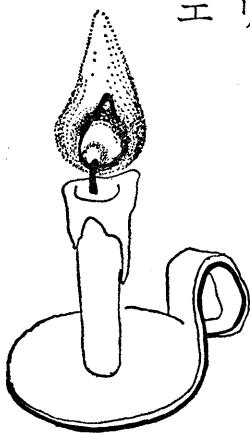
帰る時間になり、まま」とをしているRに「もう、おかげだから、片づけましょうね」と声をかけると、思いがけない拒否反応。「だめなの。今忙しいんだから」やむを得ず、

「そのいやそうを食べてしまったら、片づけましようね」と譲って待つ。

帰る時刻、庭に散っている子どもたちを呼び集め、帰り支度に忙しいひととき。庭から戻ってきたNが、「自動車の絵をかくから、紙頂だい」という。時計を見ると、降園時刻五分前。「もうお帰りだから、あしたにしましょうね」と、のどまで出かかった言葉を飲み込んで、紙を渡す。説明して諦めさせることに時間を費すより、彼が絵をかいている間に、他の子どもの帰りを急いだ方がよいのではないかといつづりの判断である。丁度支度が終つた頃、彼は、絵をかき終えて、満足して帰つて行った。不要なトラブルを起こさなくてよかつたと、ほつとする。

子どもが、自由感をもつて、ありのままに自分を出させる生活は、基本的に大切なものである。しかしその姿は、しばしば、おとの期待や、許容の範囲に抵触する。この両者の間に、どのような関係を作っていくか、それが、今の自分に課せられた課題であると思う。そして、その課題にどう応えていくかが、二年後、三年後の、子どもの生きる姿勢の中に実つてくるものと思うのである。(お茶の水女子大学附属幼稚園)

エリクソンと幼児教育 (3)



仁科弥生

(二) 筋肉と肛門期（その一）

前回取りあげたエリクソンによる八つの発達段階の第一段階について、「筋肉と肛門期」と呼ばれるその第一段階に話を進めよう。それはおおよそ二歳から三歳の終りごろにあたり、子どもの筋肉が急速に発達し、言語や識別力が増大する時期である。

この段階における身体器官の様式の特徴は、筋肉組織の発達に伴つて、前の段階の「つかむこと」によってものを専有する様式に、自發的に「手放す」「落とす」「投げる」などの様式が加わることである。このことは「保持」と「排出」とを交互に意のままに行なう能力が増大したことを意味する。そしてとくに肛門部のは二つの相反する様式である保持と排出とを交互に行なう部位であり、子どもの相矛盾する衝動に対する頑固な執着を表現するのに他のどの身体部位よりも適しているからである。しかしながら、括約筋は硬直と弛緩、屈曲と伸張という一般的二元性をもつ筋肉組織の一部分にすぎない。筋肉組織全般の発達は、子どもに手を伸ばし、握る、投げる、押しのける、ものを専有する、

或は遠ざけるなどの活動を可能にする。このことは子どもに環境を支配する力を与えることになる。と同時に子ども自身もそれを欲するようになり、自律のための戦いを始めるのである。たとえば、この段階の子どもは、いかにも愛情をこめて大人に寄り添つてきたかと思うと、突然邪険に相手を押しのけようとする。ものをため込むかと思うと、それらを惜しげもなく捨ててしまう。一見矛盾するようなこれらの行動は、実は「保持」と「排出」の様式の自律的表現に他ならないのである。

そこで、エリクソンは、この時期に発達する新しい社会的行動様式は「手放す」ことと「つかまえておく」ことであり、しかもそれらの行動様式の発達が自律的に統御されていく順序と割合とがベースナリティの形成に重要な意味をもつことになると考えている。すなわち、子どもが自分の意志と選択とで、両面価値をもつ諸機能を統御しようと試みるとき、それに成功すれば、自己と自分の能力とに自信をもつことができる。一方、もしその試みに度々失敗したり、或はあまりにも厳しいしつけが行なわれて、それを試みることさえ許されなかつたりすると、子どもの自分の身体は無能であり、外界に対してあまりにも無力であると感じる。そして退行するか、或は偽りの前進をして満足と支配とを求めざるを得なくなる。こうして指しやぶりがはげしくなり、泣き虫にな

なる。或は敵意に満ちた、侵入的、攻撃的態度をとるようになるのである。

この観点から排泄のしつけをもう一度考えてみよう。排便をコントロールする括約筋は、普通、一歳半から二歳にならないと成熟しない。このことは括約筋が十分に発達するまでは、子どもは排泄の統御ができないことを意味する。だから、子どもの身体的レディネスがととのうのを待って、排泄のしつけを始めるならば、この課題は、子どもの誇りと達成感の源泉となりうる。子どもは両親に非常に重要と思われているこの課題を自分がやりとげたことをとくにうれしく思い、ますます自分で統御をしようという意欲を強めるであろう。また、この成功によって、自分の行動を自己制御できるという自信も生まれてくるのである。ところが、逆に身体的成熟がなされる前に親が厳しい排泄のしつけを始めたり、或は放任主義から排泄のしつけが不適切であつたりすると、子どもは社会の要請にこたえる適切な対処の仕方を学ぶことができず（たとえば粗相といふような事態に遭遇して）、その結果、失敗感や無能感におそわれる所以である。このように、排泄のしつけは個人の自律性と、社会の同調への要請との間に葛藤を引き起こすことになりやすい。いうまでもなく、自律性の概念はもっと広範な行動をも包含する。この時期は、いろいろな行動領域にお

いて技能が発達する時期であり、排泄の統御はそれらの技能発達

における一つの課題にすぎない。子どもがさまざまな技能を獲得する過程において、自分の内的要求と社会との間の葛藤を克服して、成功的経験を重ねることが、子どもの自律感や有能感を発達させることに結びつくのである。

したがって、エリクソンは、この段階の発達課題は自律性の感覚の獲得であると主張する。その自律感を発達させるには、まず初期の信頼の念がしっかりと培われ、それが保証され、継続することが必要であるとする。なぜなら、この年齢の子どもは、自分と他人との区別がわからはじめ、未熟な方法ながら強烈に自己を主張するようになる。いわゆる「強情の時期」を迎える。子どもは強引に専有するか、頑固に排出するかを自分で自由に決めたいと思う。この突然の激しい衝動におそわれるときでさえ、自己に対する基本的信頼や世界に対する信頼が崩れることはないとどう信に支えられていないからである。しかし、この発達段階も終り頃になると、自分で適切に統御できる技能の種類は多くなり、子どもはそれらの獲得に大きな誇りを感じるようになる。こうして、自分一人でしたことがうまくできるたびに、子どもはものごとを適切に統御でき、欲求を満たすことができる者として自分のことを考えるなどができるようになり、子どもの

自律感が育っていくのである。

とはいものの、子どもを取り巻く環境の中で現実的な問題として彼が統御できるものは限られており、失敗することも多い。

しかも、失敗を親が厳しく叱つたりすることもある。そのような場合、子どもはきまり悪い思いや、愚かにも自分を白日のもとにさらけ出してしまったという感情にとらわれやすい。これをエリ

クソンは恥の感覚と呼んでいる。それは、自分が見られる準備ができるいないのに完全にさらしものにされているという意識、或は誰かに非難の目で見られていると意識する疎外状態のことと考えられている。また、子どもは自己の価値や、自分の世話をしてくれる人々の信念の堅さや洞察力に対しても疑惑感を抱くこともあります。その上、親への依存要求も強いこの時期の子どもは、親の不同意の表現に対してきわめて敏感である。それゆえ、失敗をした後で厳しい罰や恥を味わうことは、不安や葛藤を引き起こす原因にはなっても、子どもに不適切な行動についての内面的認識を高め、反省をうながすことにはならない場合の方が多い。

またこの恥の経験は、きわめて不快なものであるため、子どもはそれを回避しようとして、新しい活動に手を染めることにまったく消極的になることもある。このような子どもが快を感じる」とができるのは、失敗をする危険がもつとも小さい熟知した状況

においてのみであり、したがって新しい技能を習得する機会も少ない上に、成功感も小さいので、なかなか自信がもてず、いつまでも疑惑感だけが持続することになる。或は、耐えきれないほど恥ずかしい思いを経験した子どもは、正当な恐れや恥を感じるかわりに、むやみに反抗したくなるような気分におちいったり、人に見られてさえなければ、何でもやってしまうというひそかな気持を抱く場合もある。

このように、エリクソンは第二の精神発達段階において、自尊心を失っていない自己統御の感覚から永続的な自尊の感覚が生まれ、筋肉と肛門との無能感や、自己統御の喪失感や、両親から過剰に統制されているという感覚などから永続的な疑惑と恥の感覚が生まれることを重要視している。そして子どもにとって自律対恥および疑惑が第二の核心的葛藤であり、それを解決することができなくてはならない。まして、子どもの能力以上のことを親が期待しすぎることによって、子どもに度々失敗を経験させ、恥ずかしい思いをさせてはならないのである。したがって、能力感を伸ばすために、新しいことや、時には子どもにできそうにないようなことをやらせてみる場合には、失敗したとしても叱るのではなく、勇気づけてやるという親の態度が不可欠となるのである。ところで、この自律性をうながすもう一つの重要な要因は、子ども自身のエネルギーと頑固さである。子どもは自分一人であるのである。また、この時期の危機を克服して自律性を獲得した子

どもでも、時には自分にうまくできるだらうかと自己の能力に疑惑をもつこともあるが、普通は、それでも「意志」の力でいろいろな活動に向っていくのである。それに比べて、恥と疑惑の感覚をより多くもつようになった子どもは、新しい活動に挑戦することを避け、きわめて受動的、消極的になる。したがって、親や養育者は、子どもが恥や疑惑感で圧倒されてしまうことのないようには、まず子どもの要求や感情の変化に敏感でなければならないであろう。そして子どもの「自分の足で立ちたい」願望を支え、励ましてやらなければならない。とはいものの、子どもの自律の要求の中には、そのままでは社会に通用しない要求や、親の良識や善意に逆らう要求もある。そのような場合、親は忍耐強く教え、子どもが子どもなりに考えてこれを受入れるまで待つことができなくてはならない。まして、子どもの能力以上のことを親が期待しすぎることによって、子どもに度々失敗を経験させ、恥ずかしい思いをさせてはならないのである。したがって、能力感を伸ばすために、新しいことや、時には子どもにできそうにないようなことをやらせてみる場合には、失敗したとしても叱るのではなく、勇気づけてやるという親の態度が不可欠となるのである。

のが好きというだけでなく、どうしてもそうすると言い張る。その頑固さにわれをはしばしば驚かされるほどである。エリクソンはこれを第二の徳目「意志の力」として問題にしている。すなわち、この時期に、括約筋ばかりではなく、他の筋肉も使うことができるようになるが、子どもは、さらにそれらを「意志の力」で使うことを学ばねばならないと言っている。一層積極的に活動するチャンスをつかもうとするとき、自己統御と他者からの統御という二重の要請に直面することになる。つまり急速に芽生えてくる自分の意志と、他者の意志との衝突を経験するのである。しかし、この場合、エリクソンによれば、意志をもつということは強引に自分の思いを通すことではなく、自分に「できる」ことを「意志する」つまり自分の衝動を生かす判断力と決断力を次第に増大させていくことであるといふ。それは、何を意志することが可能であるかを見分ける力であるといつてもよい。

勿論、ここで問題にされているのは、意志力の基礎のことである。本当の意味の意志力は成熟した人間だけがもつものである。しかし意志の根は、他の人格的特性と同様に学びとられるものである。それは、一見関連が薄いと思われる自我の諸経験の中で、たとえば意識化や言語、身体動作などを統合する過程の中でもうとられる。この意味で、たとえば排泄のしつけは、身体要求

と外的統御の調節を子どもが意志的に確立する努力の中心となりうる。そして、子どもはたとえつけの過多や過少から深い恥の感覚や強迫的な自己への疑惑を体験したとしても、意志力が自我発達の初期に確実に育つているならば、「希望」の場合と同じように「意志の力」を維持することができる。なぜなら、成長していく子どもは、次第に何を人に期待してよいのか、何が自分に人から期待されているのかについて知識を積み重ねているからである。そして、たとえ自分の期待に反し、打ちのめされる経験をしなければならないとしても、或は自分で成功しないことが心のどこかでわかつていても、それをやらざるを得ないこととして受け入れることを学んでいるからである。

意志力が小さいと、人は新しい問題に直面した場合、すぐにはそれを投げ出してしまいか、或はそれを自分の成長の糧として、または自分にとって興味ある問題として積極的に取組むかわりに、それを自分の関係のない非現実の空事にしてしまう。したがって意志力とは、たとえ幼児期において避けられない恥や疑惑の体験をもちつつも、自分を統御し、自分で自由な選択をしようとする不斷の決意であるともいわれている。

また、エリクソンは「善意」を意志力の社会的問題をあらわす言葉としてとらえている。善意とは、意志をお互いにある程度制

限することの上に成り立つものである。幼児が仲間として新しい友だちを受入れることを学びはじめるのは、この二、三歳の時期になってからである。ピアジェの言葉を借りれば、この時期の子どもの思考はきわめて自己中心的である。したがって、人は他者と共に存して生きるものであること、そのために自分を抑えなければならないときもあることなどを、その場その時に即して親は子どもに教えないではいけない。親は、幼児の強さをほめ、励ましながら、同時に一方では、弱い者には弱い者としての権利があること、またそれを擁護することを教えないではいけない。その場合、それができるのは、法の精神を体得しなければならない。たとえば、親自身の公正な態度であると、エリクソンは強調している、この親の態度が、次第に子どもにとって自己統御の尺度となり、子どもはわがままを自制し、他人の立場を思いやり、親切心を示し、善意を与えることを学んでいくのである。

さて、先にも触れたように、この時期に、親や養育者は、彼らの価値観に基づいて、また社会規範やそれぞれの家庭生活で許される条件にそつて、子どもの行動を方向づけ、教え、制限する努力を開始する。いわゆるしつけを始める。もとより、しつけとは、子どものもつさまざまな要求や衝動を、親や養育者の価値観や要求でもつて抑えつけてしまふことではない。何でも親のいい

つけ通りに行動する子どもに育てることがしつけのねらいではない。子どもが何かをやりたいという衝動にかられたときに、社会的に承認されるような適切な方法でそれを満たすよう自分を律することがができる人間に育てることである。つまり、現実社会への自律した適応をうながすことである。先に言及した排泄のしつけは、子どもの側からの適応と社会の側からの指導との問題であると言いかえることができる。子どもは親や養育者の指図や制限を自分なりに考えて自分の中に取り入れ、自分で自分を律し、指図するようにならなければならないのである。そのときに必要となるのが、どんなやなことでもがまんして自分を励ましていく力、つまり強い意志力である。その意志力を育てるには、まず子どもの自己主張、他でもない、この時期の子どもの自律の要求をこそ親は大切に伸ばしてやらなければならぬのである。してみると、エリクソンが強調する自律感の獲得と意志力の育成とは、この時期の子どもの教育の核心をついているものであるといえよう。

自律性の発達について、情緒的、知的発達の側面からの考察と、この段階の課題の解決の失敗に起因する情緒障害についての叙述は次回にゆずることにする。

子どもとの出会いの中で学ぶこと

(4)

—年少児・Tと敬老の日の“お便り”その2—

水沼昭子

敬老の日のお便りの一件から数週間がすぎ、ほとんどの子供はそれぞれの手紙をポストに入れた。Tは、そうした中で時には仲間達のかく“お便り”的絵をみていたり、切手をはる手伝をしたり、ポストに一緒にいったりした。けれど“ぼくもしたい”とは、なかなか言つてはくれなかつた。まったく関心を示さない様な遊びを続けながら、でも、Tの全身から、今、一番気になることが“おばあちゃんへのお便り”であることが感じられた。

母親と話し合いをもつ。幼稚園の活動の中で、いつまでに、これをしなければならないと言つた思いを避けていること、結果ではなく、創り出し、動いている過程を大切にしたこと、だから、Tが周囲の子どもの“お便り”への関わりを見ながら、やつてみたくなる時まで待ちたいこと、たかが一枚

の絵なのに、と簡単に考えてしまう大人側の思いでではなく、Tの思いを大事に待ちたいことをお話する。私達、現場にあって、どうしてそうするのか、なぜそうしないのか、など細かい部分をあまり家庭に伝えないでいたことを思った。そうした事で、親の願いと私達の思い、保育の視点のギャップでできた、エア・ポケットに落ち込んでしまう子どもを思つた。両親教育とは一と構える以前の、こうした細やかな伝え合い、働きかけが重要なことなのだと知らされた。

Tのおばあちゃんの分の封筒や切手、そしてスナップ写真が担任のT先生のつくえにそつといつまでも置かれてあった。“せんせい、ぼくのところにね、お返事来たよ！”子供達の出したお便りの返事が届きはじめた頃、Tは数人の仲間に巻き

込まれる様にして、ドラエモンを描いた。いつでも自由に使える子ども達の作業台のコーナーから紙をとり、うれしそうに描いて担任にみせた。“すてきにかけたね、おみやげにするの？”Tの組では子供たちがおみやげにしたい時は、いつもリボンで絵をわざんでもらえる。子供の選んだリボンをかけて、一枚の絵も、小さな折り紙も大事なおみやげに変身する。Tは“先生にあげる”とその時言つた。この時担任は“これ、おばあちゃんのお便りにしない？”と言いたかつたに違いない。けれど、ただ“そうありがとう”と受けとつた。翌日登園するTに担任の“お礼”的ことばが待っていた。また、ドラエモンをかきはじめる。今までTの遊びは結果がはつきり出る様なものはほとんどしてこなかった。Tが何枚も、ドラエモンを描いて先生に届ける。数枚のドラエモンを手に先生はTに問いかける“この中からおばあちゃんのお便りみつけない？”“そうしてもいいよ”Tの何となくほつとした様な表情と共に答が返つて來た。彼が一番気に入つた絵が選ばれ、とうとうTはお便りを自分で投函した。運動会も間近な時だった。

Tは新しい経験にとても敏感な子供である。そして他の子が何気なく先にしてしまったその結果にも神経質な子である。ほんとうはやつてみたいのだけれど“いやだ”といつてしまふタイプのT。その子の投げて來たこの大きなサインの

前で、いかに“子供の思いに立つた園生活”が保育者側の思に立つたものであったか、さらに、子供の動きや願いを大切にと考えながら、結局は保育者側の願いや梓の中へ入れ込もうとしてしまう現実を、Tのこの出来事がまるでX線の様に我々側の姿勢を写し出してくれた。子供のその時々の動きを、心の動きや願いを受けとめきれない“何か”、皆と一緒にさせてようとする“何か”、今この子に一番大事にしてやりたい事をわかつていながら、保育者の思いを振りまわす“何か”――この“何か”なくていいのだと思いつつ、皆と一緒にさせようとする“何か”をいつも心にとめて、みづめなければならぬと思う。

Tは年長になった。まだ、物事への敏感な対応をあちこちにみせながら、でも、ずいぶん遅くなつた。担任との関わりも深くなり安心した表情がいつもあってうれしく思う。年長になつたある日“おおきいくみになつてキャンプをしたり、ほら、クリスマスには、イエスさまの劇をするね、小さい組のとき、みせていたどいたでしょ？”何気ないT先生のことばに“あ、あれ、いやだな、どこか、違う幼稚園いっちやおうかな”と、ちょっとあざけた調子だが、まさかれもないTのこの一言に、T先生も、居合せた私も、年長でのTとのいろいろな出会いを思わずにはいられなかつた。

遊びと子どもの発達 ⑪ (最終回)

描画のあそび (その四)

加古里子

子ども達は、描画能力の熟成と共に、生活実態の中で得たある

もろの印象・興味・認識・発見を共通の再確認と顯示をするよう
になる。その生活の内には家庭や社会と共に学校・園等の教場も
含まれてる。そこで得た文字や数字・時には容積・長さ等の単位
や歴史等の年号等の共通認識を遊びに転用する事は、決して珍ら
しい事ではない。¹⁰ それは時に單なる表面的な事象に止まらず、内
容的な概念や思考面にも及ぶに至る。その一例を「コトリ」と呼
ぶ絵かき遊びに見る事としよう。

「コトリ」の典型例は①の如きものである。

ここでは数字や文字が出現せず、(3-2=1)という引き算の考え方、数概念が主題となっている。しかもそれを、固苦しい題

「コトリ①」

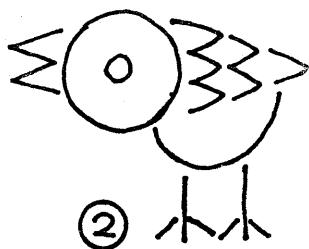
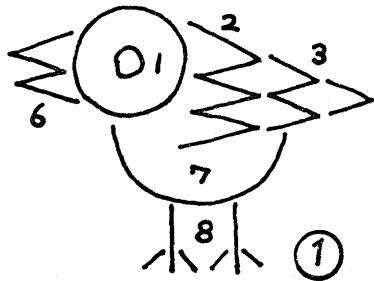
1. スイカ畠に スイカがひとつ
2. どうぼうが三四 入つて来て
3. 二四にげて 一四つかまつた
4. じいさんばあさん
5. 腹たてて
8. ラジオ体操 一二三

材ではなく、のどかな田園風景に托し、リズムある音律で展開しながら、かわいいコトリの画像をうるに至っている。誠に絵描き遊びの白眉ともいうべきものである。

既にみられた如く、この画像も単一ではなく、お腹のふくらんだものや短足なもの、或いは羽根の変形したもの等数種のものが知られている。

所が次の②は①とはやことなる叙述を行つてゐる。

「コトリ②」



1、スイカ島 ナス島 ナス島

3、どうぼうが三人

4、もう二人 もう一人

5、父ちや母ちや

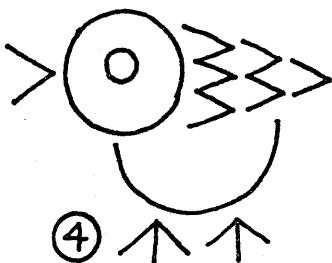
6、腹たてて

7、足三本 足三本

前述①に比して異なる大きな点は、足し算となつてゐる点である。それと共にナス島と足三本という奇妙な語の登場である。ナ

ス島は①で示された牧歌趣味、田園回顧の継続だとしよう。しかし足三本というはどうも足し算が出てくる合理世界に合致しない。どろぼうは6人だったのだから、その足は12本なければならぬのに、二度くり返しを合計しても6本にしかならない。子ども遊びなのに、そんな合理性や算数をもち出すのは愚と考える向がありとするなら、その方がおかしい。子ども達は遊びという自ら達の意向や考えや判断が自由にはばたける場であるから、イイカゲンな事をせず、彼等なりのきちんとした法則性を貫こうとするものである。②で示された足三本は何等かの事由が隠されいるとみるべきである。その隠れた姿を次の③はちらりとかい間みさせてくれている。

8、おいちだのさん　おいちだのさん

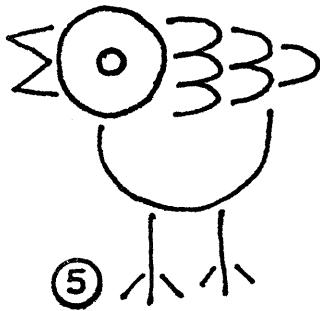


何の事はない①と②の混合型で、表現は①だが内容的には足し算かと考えられたのでは、わざわざ紹介したかいがない。注目していただきたいのは「豆」が登場した事である。ちいさな円型表示を、絵かき遊びでは「豆」と呼びならわしている他例と同じではあるが、スイカ畠に何故豆が登場したのかが秘密をとく鍵となつていて、この重要な意味がまだ不明の方に、更に次の例を対応してみていただくとしよう。

「コトコ③」

- 1、スイカ畠に
- 2、豆ひとつ
- 3、どろぼうが三人やつてきて
- 4、あとまた二人
- 5、もう一人
- 6、じいさんばあさんやつてきて
- 7、ラジオ体操

「コトコ④」



- 「口トリ⑤」
- 1、スイカ畠に
 - 2、スイカがひとり
 - 3、どうぼうが三四やつてきて
 - 4、二四がにげて
 - 5、一四とらえ
 - 6、じいさんばあさん
 - 7、はらたで
 - 8、スズメはちゅんちゅく
 - 9、めめんわゆくめめん
- ルリド述べられて、じるいんをそのままで、じいさんばあさんの立
- 1、スイカ畠に
 - 2、豆畠
 - 3、すずめが三四やつてきて
 - 4、二四にげて
 - 5、一四にげて
 - 6、じいさんばあさん
 - 7、腹をたて
 - 8、スズメの足あと
 - 9、おつかけた

「口トリ⑥」

- 1、スイカ畠に
- 2、スイカがなつて
- 3、どうぼうカラスが三四やつてきて
- 4、またまた二四
- 5、また一四
- 6、じいさんばあさん
- 7、腹をたて

- 1、スイカ畠に
- 2、スイカがひとり
- 3、どうぼうが三四やつてきて
- 4、二四がにげて
- 5、一四とらえ
- 6、じいさんばあさん
- 7、はらたで
- 8、スズメはちゅんちゅく
- 9、めめんわゆくめめん

腹を、如何に田園詩だからとて、林かヤブの雀たちがあざわらう
ようにならない——と解してはならない。何故なら、次の⑤⑥
がこれまですべての不可解な点を氷解してくれるからである。

「口トリ⑤」

- 1、スイカ畠に

「口トリ⑥」

- 2、豆畠

- 3、すずめが三四やつてきて
- 4、二四にげて
- 5、一四にげて
- 6、じいさんばあさん
- 7、腹をたて
- 8、スズメの足あと
- 9、おつかけた

もうはつきりおわかり頂いたように、スイカ畠に出て来たのは

(1) 加古 日本の子どもの遊び（上） 青木書店（79）

は、頬かむりをしたような牧歌的なスイカどろぼうではなかつたのである。それはスズメやカラスであり、だから豆が登場し、足あとが三本のみつゆびでつかまつたのがチュンチュンないていたのである。更に考えるなら、その当の「どろぼう」の手配書かモンタージュ写真が出来上つたこの図になつていてるのであらう。

(2) 同 子どもと遊び 大月書店

子ども達の遊びにおいては当初描かれた詩や叙述の意味が、子ども達の間で、次々と伝承伝播する間に、少しづつ変形をしたり脱落や改訂されてゆくものである。時によると子どもの共通の意識や暗黙の了解事項が省略され秘とくされる時がある。そして時代や世代を異にすると、わかりきつたる事項がすっかりわからなくなってしまう事がある、それらを解明する事は「コトリ」のように多くの同種事例を対応照應させる手間のいる作業と解析推理が必要となる、しかしそれによって明らかとなるものは、単に「コトリ」の秘密ではなく、それを生み出し、創出した「子ども」のみずみずしい成長へ挑戦している姿という事が出来るだらう。

れ れ や カ な
で き ご と

大 道 博 子



—その一—

“おばちゃん どうぼうってどんな顔してるの？”（4歳女児）

。

“おばちゃん、ぼくお年玉30円でいいよ。30円以上はだめ”

。

“だつて おばちゃんのお金なくなっちゃうから”（小1男児）

。

“年をとつて味がわからなくなつてしまつておいしいごちそうが

もう作れなくなつてしまつた”（81歳そう祖母）

“そんなことないよ、おばあちゃんの作ったごちそうおいしいよ。ねえお母さん、おばあちゃんとお母さんの作ったごちそうは

“ぼくを だれもかわいがってられない。皆がぼくをばかにして
泣いたり笑ったり、甘えたりすねたり叱られたり……七人家族
の一日はそれはにぎやかです。そのにぎやかさの中で私たち大人
は、ときには返事につまり、涙が出る程笑い、その心根のやさし
さにホロリとし、暗くなつても帰つてこない子どもにオロオロし
……。といった三人の子ども中心の生活がくりかえされていま
す。

私は随分長い間、乳幼児が身近にいない大人だけの生活をしておりました。ですから家庭の中での幼児の生活ぶりは、保護者の話からまた近隣の姿を通して知るという程度の内容しか持つておりませんでした。幼稚園の中で子どもたちの生活については、ある程度話をすることはできるとしても、家庭での子どもの生活については、具体的に何も話すことはできませんでした。家庭生活の重要さを説きながらも、このことについて切実に考えることもなく過してきましたと 思います。しかし、甥夫婦とその子どもたち、私の母と私と共に生活をするようになってから、長年の夢がかなえられたようなうれしさを感じているのです。出生してから日に日に人間として生長していく姿を目撃することができるということです。

すでにその子らしさをもつて幼稚園に入園してくる子どもたちを迎えて、私達は教育をしていくわけですが、その子どもたちが家庭で形成されていく過程や、ときどきにまぎ起るいろいろなできごとにかかわる大人たちとの人間関係の現実の姿を見ることは、私にとってかけがえのない勉強の場でございます。

めまぐるしくいろいろなことが頭の中をかけめぐり、その一つ一つを確かめずにはいられない子どもの姿を見る時、大人ではなくても想像できない子どもの世界があることを知らされます。ま

た、五ヶ月の弟が生まれ、大人たちの世話が集中することにしつとし、すねたり甘えたりする姿をみると、まだ生後五年しかたつていないと、このことを改めて思つたりします。

幼稚園で園長として保護者に話をしながらも、なかなか理想通りにならない家庭人としての自分の姿を思うことがあります。しかし両方の立場の話ができるということは、今までと違い具体性をもつた幾分なりとも保護者の方に納得していただける話ができるのではないかと思つております。

—その二—

昨年度の年間行事のあり方の反省から、今年度はクリスマスのプレゼントとしての贈りものを「お年玉」として子どもたちに贈ることにいたしました。

「お年玉をどのようにして、子どもたちにプレゼントしようか」と思案していた時、ずっと以前に耳にした歌が、ふと浮んできました。

実際には歌った記憶はなく曲はわからないのですが、はじめの歌詞だけ妙に印象に残っていたのです。それは「お正月さんがいらっしゃったよ……」ということばです。「これがいい、サンタクロースの代りにお正月さんでしょう」

それから数日間、園長の内職がはじまりました。今までにこそとためていた包装紙や製作の残り紙・金銀のテープを利用して、ひまひまに作っていました。

細長く切りつないだ紙や、うずまき状に切った紙や、折りたたんだ紙に各クラスのようすをもりこみ、お正月さんからのメッセージとしました。次にその手紙を入れる箱ですがマジックインキの入っていた小箱にそれぞれクラスカラーのビニルテープをまき、リボンをつけて飾りました。

箱の中にポツンと手紙だけでは寂しい感じがしたので、何か子どもの遊べるものと思い、カラー波ボール紙でこまを作つて入れることにしました。波ボール紙を細く切りくるくると巻けば簡単にできると思っていましたのに、意外にむずかしく3つ目位からコツがわからうまく作ることができるようになりました。

子どもに何かを経験させる時、教師も作つたりしてみることの大切さを改めて感じました。自分が体験してみると、子どもに経験させる時の指導のポイントがわかると思います。例えば、あらかじめ知らせておくとよいことは何か。子どもに自由にさせながら考えさせるところはどこか、教師が援助してやる部分はどこなど予想できると思います。この原則ともいえることがおろそかになつてゐるのではないでしょか。

波ボール紙の幅や色・巻く量を変化させながら10個のこまを作りあげ、箱に2個ずつ入れました。プレゼントも一つ一つ紙袋に入れてシールで止め、クラスごとに包装紙でつつみリボンをかけて準備は終りました。

担任の先生にもどんなものがどのように入つているか当日まで秘密にしてありました。

当日、主任と二人で小箱とプレゼントを捧げもつて一クラスごとに回りました。

それぞれ遊んでいた子どもたちは、担任の先生の呼びかけに、さつと集まつてきます。どの子どもも「何だろう?」と期待の目でじっとプレゼントをみつめています。

「今日のこの顔は、どの子もすばらしいなー」と先生は感じ、真剣にいきいきと全力投球できるような生活を子どもに経験させたいと思つたことです。

どうしてこの包みを園長先生が持つてきたかを話し、あとは担任の先生に任せることにしました。五人の先生がそれぞれ演出よろしく子どもに箱の中の手紙をよんだり、こまをみせたりしたのですが、クラスごとに子どもの反応がことなり、そのクラスらしいが感じられて興味深く思いました。

「誰からのプレゼントか?」ということが問題で「サンタクローラ

「スだよ」という子どももいたのですが、メッセージの最後の「お正月さんより」と、うつとばを聞いて、

「へえー、お正月さんだって！」

「お正月さんでどこにいるのかな？」

と、素直に受け入れてくれたようです。先生から「お正月さんというのは新鮮でいい」とか「なる程お正月さんはいいですね」などと好評でした。

とにかく新しいこころみは、私の思いを先生方にうまく受けてもらうことができ、子どもたちに楽しいふんい気の中でプレゼントすることができうれしいひとときでした。

—その三—

「園長先生はおばあさん？ ほんとうにおばあさん？」K男は私と顔を合わせるたびに聞くのです。
「家へ帰ると先生はおばあさんよ」と答えると、とても不思議そうな顔をする。

「先生、なにどし？」

「先生はライオン」

「ライオンなんてないよ」

「年いくつ？」

「いくつかな？」しばらく考えて

「50歳」(当ふすといふども遠からず、なかなかいいところをいあてるものであると心の中で思う)

「そう、当たり」

たしかに5歳の子どもからみれば、おばあさんとしかうつらないでしょ。しかし、何度も何度も不思議そうに聞くということは、その子どものおばあさんというイメージと、私から受けるイメージとが合わないのであろうと思うのです。

考えてみると近頃電車の中で若い人が席を立ってゆづつてくれたり、あいている席を教えてくれたりすることが多くなってきました。若い人からみれば随分年寄りに見えるのでしょう。あるいは疲れ果てたあわねな姿にうつたのかもしれません。

幼稚園でまた家庭でなににもとらわれないさわやかな子どもたちに接しているうちに、年月をかさね、いつのまにか子どもたちから「おばあさん」といわれるようになってしましました。いつのまにかといえることは幸せな生活であったといえるかもしれません。

指導・行事・事務処理などについて毎学期反省会を行なうのですが、その中で私が最も関心のあることは、各クラス担任の指導に対する反省です。子どものみ方・生活指導のあり方・教材の選

択・遊びへのかかわり方・ひとりひとりの子どもの成長の姿のとらえ方など反省内容はさまざまですが、年齢や経験年数に応じたその先生らしい反省がなされ、心を新たにして三学期にそなえ、あるいは二年目を迎えることができたことをうれしく思います。特に、経験の浅い先生が自分の指導に行きづまりを感じ、真剣に思いなやむ姿に心打たれました。かつては私にもこのような時代があつたとなつかしく思うと同時に、最近の自分自身を振りかえり恥ずかしさと寂しさを感じたのです。今までの経験だけに頼つてものをいっているのではないだろうか。ぬるま湯にひたり、とにかくその日をすごしているような姿が、若い人に席をゆずられるようなことになったのではないかと思うのです。

新聞やテレビで報道されている子どもたちの非行や暴力、親子関係のひずみや社会の重圧から発生するいろいろな事件を人々はどういう受けとめているのでしょうか。年ごとに情緒不安定な子どもがふえ、園に対する保護者の意識も変ってきてています。暗い将来につながる芽が皆無であるといい切ることはできないよう

に感じられる此の頃です。私たち教師も汚染されている一人であることを反省しなければならないと思います。

一斉保育・自由保育・自由遊びという幼稚園特有の用語が、指導書から消えて何年かを経過しました。しかし、永年にわたって

しみこんだこれらの用語は依然として存在し、形態にとらわれた論議がくりかえされていることは残念でなりません。形態と内容を混同し二者択一・互いにその欠点のみを指摘し合う傾向が根強く残っています。子どもの発達に即した指導のあり方として形態や内容を考えていかなければこの論議から脱することはできないと思います。

子どもたちから「おばあさん」といわれることは仕方がないとしても、いつまでも何かを求めて歩みつづけていくファイトを持ちつづけていきたいと、思いを新たにしているこの頃です。

。

原稿依頼の電話をいただきましてお受けすることにしましたが、あれこれ考えている間に約束の日がせまりあわてたことですが、むずかしい話をすることもかくともできない私ですから、ありのままのできごと、思いでこの頁をうめさせていただくことにいたしました。

(名古屋市・西山台幼稚園)

『復刻・幼児の教育』 大正・昭和篇

〔趣旨〕

『幼児の教育』誌は、明治三十四年『婦人と子ども』と題されて創刊されて以来、今日に至る迄八十年の長きに亘り、わが国幼児教育の発展と歩みを共にして來た。この間、幾多の先駆的保育理論、実践研究發表等が誌上を飾り、わが国の幼児教育の發展に測り知れない寄与を成して來た。現在まで継続する幼児教育専門誌として、わが国最長であるのみならず、雑誌出版史上、極めて稀な例を示している。

本書は、昨年刊行の『復刻・幼児の教育』(第一期・明治三十四年～大正九年)に続き、大正十年～昭和十九年の二十四年分、二十四卷を、一挙に復刻刊行するものである。大正・昭和期はわが国幼児保育が日進月歩の高進を示し、時代背景もめまぐるしい変貌を遂げた時期にあたる。

わが国の幼児教育の進歩の様相を概観する好個の原資料として、また先達の抱負や熱意の結晶する稀有な文献として、

現代保育を考える人々に資することを念願する。

〔体裁・内容〕

全二三巻、別冊著者別索引

第二一巻～第四四巻 大正十年～昭和十九年

『幼児教育』(第二三巻第八号まで)

『幼児の教育』(第一三巻第九号以降)

〔刊行〕 名著刊行会

〔定価〕 現金価格二一五、〇〇〇円

〔申込・問合せ先〕

総発売元・株式会社 コーディック

東京事務所 千代田区神田神保町三一二五 精和ビル

TEL (〇三) 二九五—三五六一

大阪本社 大阪市西区北堀江町三一六一三三

TEL (〇六) 五三一一九八〇一

『幼児の教育』復刻記念懸賞論文募集

このたび、雑誌『幼児の教育』復刻を記念して、左記の要領で論文を募集することになりました。多くの方が、優れた論文をおよせくださいますことを、期待しております。

〔記〕

一、第一期、第二期の復刻『幼児の教育』を素材として、独自の考察を試みたものであること。

一、応募期日 昭和五十六年九月末日まで

一、応募要領 ベン書き（またはボールペン）とし、四百字詰縦書き原稿用紙に四十枚以上百枚以内。上表紙に「復刻記念懸賞論文」と朱書の上、「論文題目」「姓名」「住所」「所属」を記入のこと。審査は上表紙を外し、本文のみを対象

として行ないます。尚、名前入りの原稿用紙は御遠慮下さい。

一、賞金及び賞品 最優秀賞一名 賞金二十万円

二等賞 二名 五万円

三等賞 三名 一万円

参加賞 全員 記念品

最優秀論文は、本誌に掲載いたします。

一、問合わせ先及び応募先

〒112 東京都文京区大塚二一一一 お茶の水女子大学附属

幼稚園内 日本幼稚園協会『幼児の教育』編集部

尚、電話でのお問合わせは御遠慮下さい。郵便でお願いいたします。

主催 『幼児の教育』編集部

後援 株式会社コーディック

護国寺の森の緑が濃さを増してきた。

その緑にしばらく目をとめていると、最近、熱い思いをもって読んだ書物のこと

が心に浮んできた。

そのひとつは、私が米国留学当時にお世話になった北川台輔氏の遺稿、「人格の完成を索めて」という文章である。聖公会の司祭であり、第二次世界大戦の中に、米国にあって日系人のために尽力し、戦後は世界キリスト教協議会の指導者として、アメリカ国内のみならず、アフリカ、ベトナムなどの人種問題のこと、国際的に活躍された。私は、氏がいつも他人の世話と雑用に、忙しく追われながら、私もまたその雑用をふやしたひとりなのであるが、私の話をきいて下さったとき、心にふれたスピリットを忘れることができない。私が疲れて人と会うのも面倒な思いのときに思い出すのは、この先生にふれたときのスピリットである。先生は、学者を志しながら、人の世

話で一生を終えられた方である。スイス

で、六十歳で亡くなつてから十年になる

が、最近、再びその遺稿を読み返し、忙

しく動いておられた先生の心の中にある

たのはこうしたことだったかと、あらためて目を瞠らされた。一万タラントの負

債のある家来に対し、主人がその負債をゆるしたという新約聖書のたとえ話を

解説して、「一万タラントの大金と、こ

の家来と自分との間にある交わりとを比

較してみる時、この主人には交わりの方

が比較にならぬ程に貴く値高いものであ

つた」。一見不合理なたとえ話の中に、「交

わりを無上に尊重する心」を読み、「交

わりの維持成長のために全世界の富をさ

え使用することを惜しんではならない」

と言われ、これこそが一人前になる

ことの条件であると述べられる。

子どもとの間で、私はスピリットを残しているだらうかと護国寺の緑の中であらためて考えた。

(津守真)

幼児の教育 第八十卷 第八号

八月号 © 定価二七〇円

昭和五十六年七月二十五日 印刷

昭和五十六年八月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼
発行人 津 守 真

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

振替口座東京九十九六四〇番

印 刷 所 図 書 印 刷 株 式 会 社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 フレーベル館

◎本誌御購読についての御注文は発売

所フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良品がございましたら、おとりかえいたします。

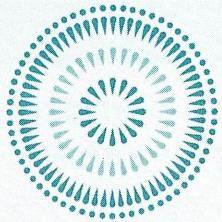
新たなる保育を探る

保育の探求

●編集 坂元彦太郎・岡田正章・神澤良輔・河邊晃・林健造・森上史朗

保育の探求

*編集
坂元彦太郎
岡田正章
神澤良輔
河邊晃
林健造
森上史朗



泥まみれの現実の中に、
幼児の豊かな可能性を信じ
ていく——このロマンこ
そ、生きた教育の原点では
ないか。本書は、幼児の実
体を直視し、保育の現代化
を探る近来の好著です。

A5判／428頁 送料300円 定価2,000円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

新刊案内

気になる子どもたち —幼児の精神衛生と保育—

平井信義著・B6判・252頁・定価1,000円・税250円



どの子もこの子もみな同じ。子どもの心から障害をとりのぞこう。

保育しにくい子どもがクラスにいるときどうするか。さまざまのケースの原因をつきとめ、保育の方法について助言すると同時に保育者の心構えを説く。

大場牧夫保育対談 —幼児教育の本質を求めて—

大場牧夫著・A5判・240頁・定価1,200円・税250円

保育実践者が保育の本質と重要性をさぐる対談集

幼児をどのような人間に教育するのかという教育目標や、幼児保育は何をどう発展させるのかという実践の問題点など、保育の基本的な問題をとりあげて論ずる対談集です。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課 (03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館